

青森県埋蔵文化財調査報告書第108集

前比良遺跡

昭和62年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第108集

まえ ひ ら
前 比 良 遺 跡

——県営三戸地区広域営農団地農道整備事業に係る——
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和62年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は昭和61年度に、県営三戸地区広域営農団地農道整備事業予定地内に所在する南部町前比良遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施しました。

遺跡からは、縄文時代と奈良時代の遺構・遺物が発見されました。

奈良時代では堅穴住居跡3軒が検出され、それに伴う土師器、鉄製品、石器等の遺物が発見されました。3軒の住居跡はいずれも火災に遭っており、炭化した家屋材が多数検出されました。

本報告書は、この発掘調査の結果をまとめたものであり、いささかでも文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後でありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位からの御協力、御指導を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

昭和63年3月

青森県教育委員会

教育長 本間茂夫

例 言

- 1、本報告書は、昭和61年度に実施した県営三戸地区広域営農団地農道整備事業に係る南部町前比良遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2、執筆者の氏名は、依頼原稿は文頭に、そのほかは巻末に記してある。
 - 3、挿図の縮尺は遺構（%・%）、土器・鉄製品・石器（%・%）、等、種類、器種毎に統一をはかり、それぞれスケールを付した。また、挿図中で使用したスクリーン・トーンの表記は次のとおりである。

石器使用痕 タタキ スリ 焼土 地山

4. 土層観察に用いた色調、粒径区分等は「新版標準土色帖」(小山・竹原: 1978) を参考にして表記した。

- 5、資料の鑑定並びに分析については、下記の方々に依頼した。

炭化材樹種の同定	元奈良教育大学教授	嶋倉巳三郎
火山灰の分析	奈良教育大学教授	三辻 利一
石器石質の鑑定	青森県立八戸高等学校教諭	松山 力
奈良時代の堅穴住居跡の建築学的復原	八戸工業大学助教授	高島 成佑

- 6、発掘調査及び報告書作成にあたっては次の諸氏から御教示を得た。(敬称、所属機関名省略、順不同)

岩見誠夫、小井川和夫、小川貴司、小田野哲憲、加藤邦雄、桜田 隆、高橋信機、

高橋與右王門、船木義勝、沼山源亮治、馬場栄二、小井田幸哉、宇部則保、本當春一

- 7、引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と刊行西暦年で示した。(例 青森県教委:1988)

目 次

序	第V章 遺構外の出土遺物	40
例 言		
第 I 章 調査に至る経過と調査要項	1	
第1節 調査に至る経過	1	
第2節 調査要項	1	
第 II 章 南部町の遺跡と本遺跡の地質	5	
第1節 南部町の遺跡	5	
第2節 前比良遺跡の地形と層序	8	
第 VI 章 分析と考察	40	
第1節 前比良遺跡出土の炭化木	46	
第2節 前比良遺跡第3号住居跡の復原考察	48	
第3節 溝状ピットについて	52	
第4節 地滑りについて	53	
第 VII 章 まとめ	55	
第 III 章 調査の方法と経過	11	
第1節 調査の方法	11	
第2節 調査の経過	11	
第 IV 章 検出遺構と出土遺物	15	
第1節 奈良時代の竪穴住居と出土遺物	15	
第2節 奈良時代の竪穴遺構と出土遺物	30	
第3節 繩文時代の溝状ピット	31	
第4節 繩文時代の土壤	35	

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

昭和60年6月、青森県農林部が建設を進めている県営三戸地区広域営農団地農道整備事業の計画路線が南部町に所在する前比良遺跡にかかることが確認された。

その措置について、県農林部と青森県教育委員会が協議した結果、現状保存は困難であるとし、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

遺跡は分布調査の結果から、名久井岳北麓の標高120～130mの狭い丘陵上に立地しており縄文時代中期・後期・晩期の遺物散布地で、当該期の集落跡が予想されていた。農道はこの小丘陵を横断する形で設計されており、昭和60年9月26日に、当該遺跡の1部、1,400m²の発掘調査の依頼があった。調査は、昭和61年4月23日から同年6月17日まで実施することになった。

(三浦圭介)

第2節 調査要項

1. 調査目的

県営三戸地区広域営農団地農道整備事業実施に先立ち、当該地区に所在する前比良遺跡の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 調査期間

昭和61年4月23日から同年6月17日まで

3. 遺跡名及び所在地

前比良遺跡 三戸郡南部町大字赤石字前比良28番地他

4. 調査面積

1,400m²

5. 調査委託者

青森県農林部

6. 調査受託者

青森県教育委員会

7. 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8. 調査協力期間

南部町教育委員会

南部町役場

三八教育事務所

9. 調査参加者

(1) 調査指導員

村越 謙 弘前大学教授

(2) 調査協力員

松村 剛 南部町教育委員会教育長

(3) 調査員

松山 力 県立八戸高等学校教諭

橋本正信 県立八戸南高等学校教諭

春日信興 名川町立劍吉中学校教諭（現三八教育事務所指導主事）

(4) 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課長 市川金丸（昭和62年4月 調査第三課長から）

総括主幹 調査第一課長事務取扱 新谷 武（現木造高等学校種塙分校教頭）

総括主査 三浦圭介

主 事 赤平智尚（現主査）

調査補助員 木村隆文、金枝律明、竹内 史、葛西直子

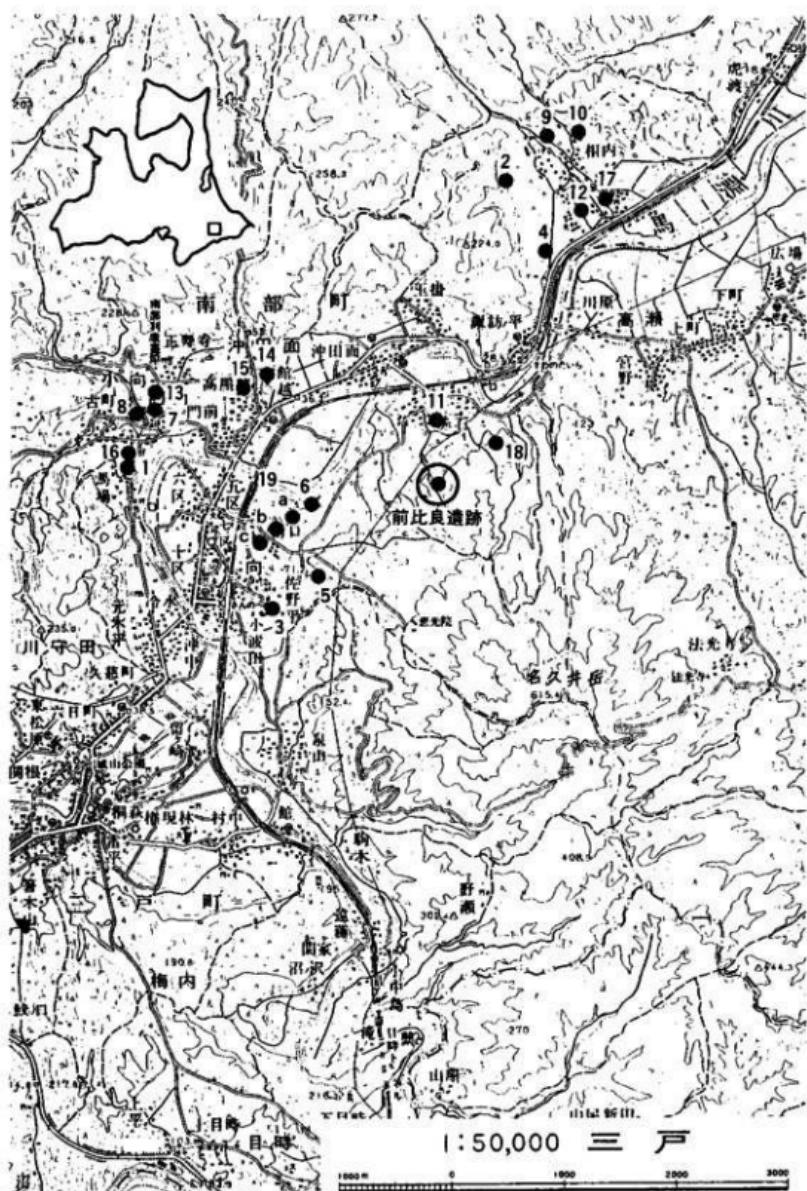


図1 前比良遺跡と南部町の遺跡

(国土地理院発行5万分の1「三戸」を複製)

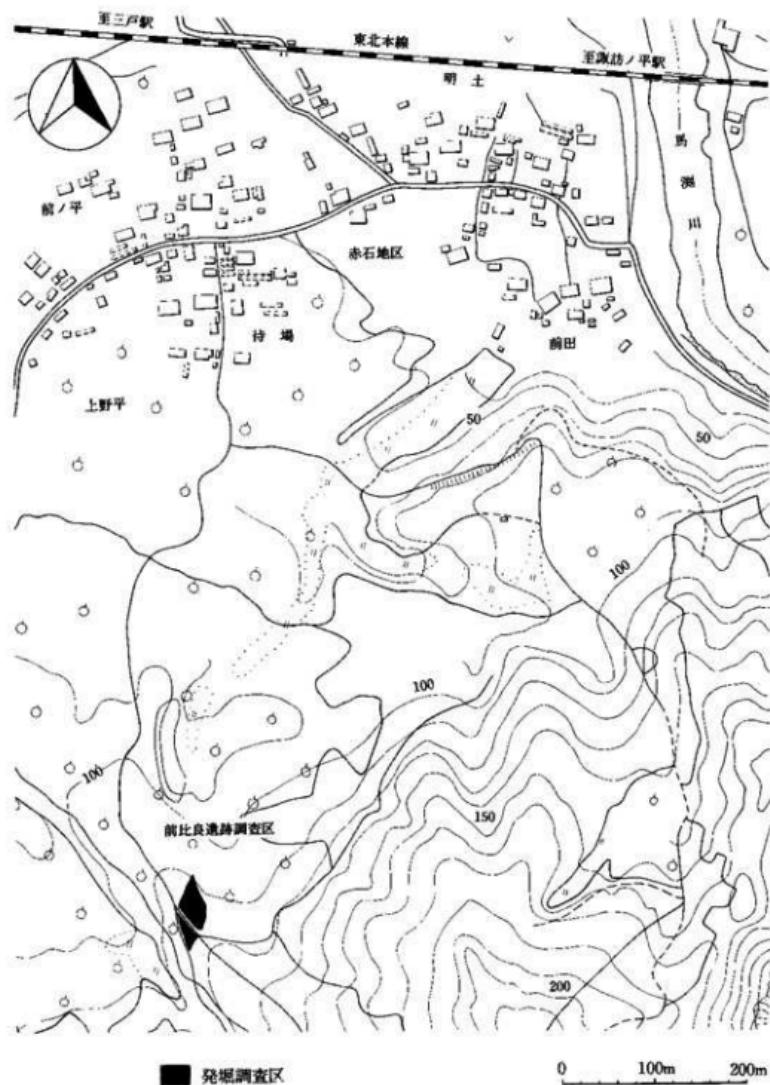


図2 前比良遺跡の調査区と周辺の地形

第Ⅱ章 南部町の遺跡と本遺跡の地質

第1節 南部町の遺跡

青森県立八戸南高等学校教諭 橋本正信

【原始・古代】 当町を貫流している馬淵川流域には現在、遺跡が10余箇所確認されている。旧石器時代の遺物は未発見である。縄文時代の遺跡は10箇所あり、馬場遺跡などで前期の遺物が確認されている。時期的には晩期の遺跡が最も多く、下比良Ⅱ遺跡では猿形の土偶が発見されている。弥生時代の遺跡は現在のところ未発見である。

古代の遺跡では平安期のものが2箇所ある。赤石の待場遺跡、相内の沢遺跡で、両者とも保存状態が良好で、ともに土師器の甕・壺など多数が発見されている。立地などから判断して、大規模な集落跡であった可能性が強い。当町では未だ本格的な発掘調査が行われたことがなく、極めて断片的な資料のみであり、今後の調査の進展に期待するところが大きい。

【中世】 「吾妻鏡」に「糠部駿馬五十疋」とあり、「源平盛衰記」に三戸立の名馬が記されているように、当地は古代末期から馬産地として知られる。永正年間（1504～21）ごろの糠部九箇部馬焼却図（古今要覽稿）に「あひない」とあり、相内の有文字印は良馬とされていた。南部の史書は建久2年（1191）に甲斐の南部光行が牧場経営の手腕を買われこの地に下向したと伝え、相内館、平良ヶ崎城、正寿寺館、大向館、馬場館を相次いで築城したといわれる。元弘4年（1334）と推定される南部師行書状（遠野南部文書）には「わせた」（早稲田、平良崎の近地）「ひしやもんたう」（毘沙門堂＝永福寺）「おほむかゑ」（大向、平良崎の近地）などの当町の地名が見える。南北朝期に根城南部氏は北奥の南朝勢力として威勢を振るい、当地域にもその勢力基盤を築いたもようである。大向の恵光院（長谷寺）には長慶天皇伝説が伝わるとともに南朝年号の天授2年（1376）の墨書銘のある十一面觀音があり、永正9年（1512）の奉納札が同院と古町の隅ノ觀音堂に残されている。

室町末期から戦国期にかけて根城南部氏は急速に衰退し、代わって三戸地方に根据を置く三戸南部氏が台頭してきた。三戸南部氏には不明な点が多いが、天文8年（1539）24代晴政が將軍足利義晴の名の一字を賜って馬を献上し（大館常興日記）、永禄6年（1563）には京都勤番を勤め、関東衆25人のなかに数えられるに至って南部一族の支配的立場に立つようになった。南部晴政の当初の居城は本三戸館と称された当町の聖寿寺館と伝え、天文8年の赤沼備中の放火による炎上後隣町三戸の城山に三戸城を築き、移転したものとみられる。今でも当時の城下町

を「古町」と称し、三光寺境内には26代南部信直夫妻の墓、27代利直とその子利康の塗屋が現存する。南部利直は寛永9年（1632）江戸で逝去し、正寿寺に葬った。塗屋は県重宝となっている。前年に死去した四男利康の塗屋は、利直が三戸郷中1か年の収納高をあてて創建、桃山様式の華麗な建造物で、昭和28年国重要文化財に指定された。慶長3年（1598）の「館技支配帳」によれば、その後、当町のうち赤石館に桜庭安房2,000石、小向館に小向小四郎150石が配置されている。

南部町遺跡一覧

	名稱	所在地	種別	地目	遺跡・遺物の概要
1	馬場	南部町大字小向字馬場61	縄文包含地	畠地	東方に馬瀬川を見下す高台、北方に猿渡川を見、緩傾斜をもつて続く丘陵地。りんご畠20aほどの包含層から多数の前期土器片を探査。
2	蛭里日月	南部町大字相内字蛭里日月107	縄文包含地	畠地	馬瀬川の河岸段丘を東南に見下す山腹上に開けた傾斜地0.5haのほどに包含層がある。中後期土器片を探査。円錐上層C式土器1個（完形品、相内小学校所蔵）が出土した地点を発掘者回顧で確認。
3	佐野平	南部町大字大向字佐野平25	縄文散布地	林地	名久井丘山麓につらなる丘陵地。昭和33年頃、旧南部中学校時代屋外運動場整地の際、後期土器片が出土したという（現南部中学校所蔵）。
4	上の平	南部町大字相内字上の平82の1	縄文包含地	道路畠地	馬瀬川左岸の河岸段丘上、昭和38年国道拡張工事の際、多量の後期土器片が出土したという。
5	川代	南部町大字大向字川代27	縄文散布地	畠地	名久井丘山麓の丘陵地。晚期の小型浅鉢土器1個を発掘。
6	下比良	南部町大字大向字下比良11の2	縄文散布地	原野	名久井山麓に位置しており、墳墓として登録されている「右木光塚」遺跡と同遺跡である。若干の晚期土器片を採集。以前出土した遺物として、晚期壺型土器1個がある。また晚期壺型土器が東京国立博物館に所蔵されている。
7	村中	南部町大字小向字村中59	縄文包含地		猿渡川と馬瀬川の合流地点でたらち切られた谷間に臨む高台。昭和23年頃、道路整備の際に出土した遺物は、晚期の台付鉢型土器4、壺型土器4（大型1、小型3）、鉢型（深形文）土器1、上器片若干で、大洞C1～C2式に分類されると思う。
8	勝沢	南部町大字小向字勝沢32	縄文包含地	山林畠地水田	猿渡川北部に位置する小山ほどの高台と、その東側の傾斜地から低地にかけて晚期土器片が散布している。大洞C1～C2式の台付鉢足口、香村形土器などの完形土器が多い。
9	室畠	南部町大字相内字室畠55	縄文包含地	畠地宅地	馬瀬川左岸西北に開けた河岸段丘上の傾斜地にあり、山麓にほど近い。晚期土器片が散布。
10	荒屋敷	南部町大字相内字荒屋敷89	縄文包含地	宅地畠地	前記の室畠遺跡と隣接している為、同一遺跡と思われるが字名で区別した。晚期の完形土器8個（深鉢、浅鉢、壺、皿）石器多数、石斧などである。
11	待場	南部町大字赤石字待場15	縄文包含地	畠地	馬瀬川河岸段丘右岸上の台地。赤石長一郎氏所蔵の出土遺物。晚期土器片、奈良時代土器6個（壺2・大、小各1、台付壺1、平底壺2、壺1）で、全て完形品。

	名 称	所 在 地	種 別	地 口	遺 跡・遺 物 の 概 要
12	沢	南部町大字相内字沢55	開文包地(住居跡)	畠地	馬瀬川左岸の河岸段丘で、川と山麓との間に位置する台地。相内小学校プール建設に伴う水道管敷設の際、土師器が出上。相内与一郎氏宅に、甕(復元可能)1個と、甕2個分の土器片が保存。
13	聖寿寺館	南部町大字小向字正壽寺	中世城館	畠地	二戸城の北4km、正寿寺集落南西丘陵に位置する。南部11代から24代までおよそ200年間居城したとされ、幅10m、長さ300mの掘削をめぐらす。主郭から中國の青磁碗、皿、染付皿、美濃の藍などの陶磁器、青銅製香炉、糸臼など14~16世紀中頃の遺物採集。
14	平良ヶ崎城	南部町大字津田面字平古原	中世城館	校地	高山町から南方に延びる丘陵の先端部に位置する。茶城は初代南部光行とされており、尾根を幅10mの掘削で南北に切断している。
15	佐藤城跡	南部町大字津田面字佐藤樋	城 館	宅地	平良ヶ崎城の西方200mの台地上にある。平良ヶ崎城と橋で結ばれていたとされる郭で、幅10mの堀が巡ぐる。
16	馬場船	南部町大字小向字馬場	城 館	宅地	猿渡川と馬瀬川との合流点に残まれた天然の要害の地である。四方に土塁、堀が回っていたとされているが、現在では南側に遺るのみである。
17	相内城	南部町大字相内字規定敷	城 館	宅地 境内	相内坂落南京東部低地に突き出した舌状の台地を東西に延びる堀削で切断して城域としている。南部光行が入封した際の仮の宿とした場所といわれ「一夜懸の館」「花見館」ともいう。
18	赤石城	南部町大字赤石字赤城	城 館	畠地	北方を馬瀬川に臨む断崖絶壁上にある。南側に幅3m、長さ20mの堀削があり、櫓庭安房の居館と伝えられる。
19	大向館	南部町大字大向字下北奥	城 館	畠地 山林	大向館(葦神館(a))・蝦夷館(b)・中山構造館(c)を総称して大向館という。

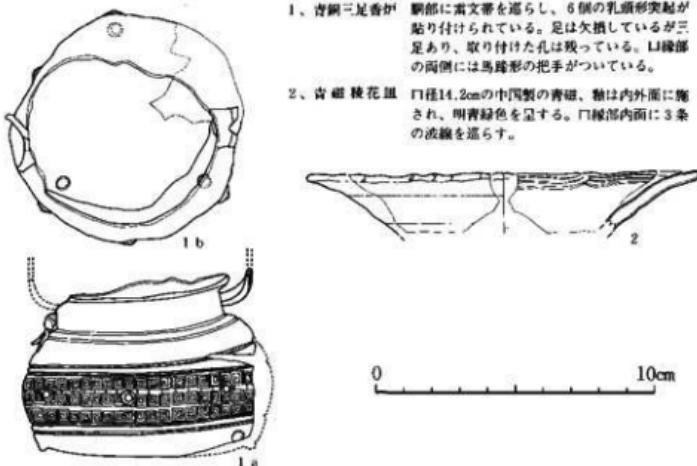


図3 聖寿寺館採集遺物(青銅三足香炉・青磁模花皿)

第2節 前比良遺跡の地形と層序

青森県立八戸高等学校教諭 松山 力

位置と地形

前比良遺跡は、名久井岳山頂(615.4m)から北々西方に約2.3km離れた名久井岳山塊の北西側山麓線に接する高館段丘最奥部にある。遺跡の西方から北方にかけ馬瀬川が曲流する。遺跡の西方1000m付近で路流を東南東方向から北東方向に変えた馬瀬川は、北方1100m付近で東方に変え、さらに南南東方向に折れた後、遺跡の北東900m付近で再び向きを変えて、北東～北方向に進路を移しながら流れ去る。

名久井岳山塊北西側山麓線と馬瀬川とに挟まれた幅500～900m程度の馬瀬川南東側沿岸の大部分は、全体としてみれば北西方に段を下げる洪積段丘群となっていて、上位から高館段丘・田面木段丘・名久井段丘の3段に区別される(図4)。遺跡周辺の高館段丘面は丘陵状に起伏しながら全体としては北西に傾斜し、遺跡は名久井岳斜面縁辺から舌状に北西へ突き出す高館段丘のゆるやかな小尾根の根元に位置している。

層序

名久井岳は、地質構造上は南南東～北北西にのびる背斜軸上に頂部をもち、新第三系中新統に属する砂岩・凝灰岩類と安山岩類を中心とする岩石で構成されている。遺跡周辺の基盤はおおむね中新統で、その上に高館火山灰層以上の火山灰層群がある。遺跡周辺にみられる火山灰層(浮石層を含む)は、下位より高館火山灰層・八戸火山灰層・南部浮石層・中撤浮石層・十和田b降下火山灰層浮石部・十和田a降下火山灰層の6層で、八戸火山灰層以上の各火山灰層の間には、黒色土類を中心とする腐植土が発達し、最上部は腐植土に遷移する。

発掘の行なわれた地点における掘り取りの最下限は高館火山灰層最上部で、ここまで土層を上からI～XVIの16層に区分した(各層の厚さは遺跡内におけるふつうの厚さ)。

I層は表土(盛土を含む)で場所によって色調や明度を異にするが、盛土を別として、ふつうは粘性に乏しい黒褐色～暗褐色のシルト状土層で、乾燥すると白っぽく変色する。

II層は粒径数mm前後～20mm(最大30mm以上)の堅い灰白色浮石を多量に含むシルト状黒褐色土層(厚さ10～50cm)で、灰白色浮石はところにより厚さ2～5cmの浮石層をつくっていて、これは十和田b降下火山灰層(2000B.P.?)の浮石部に相当する。

III層は中撤浮石層から遊離した砂状浮石粒を多量に含む砂質シルト状の黒褐色土(厚さ10～45cm)で、下ほど浮石粒の密度を増して明るく、上ほど黒色に近い色調となる。

IV層は暗褐色～暗黄褐色のシルト状土層(厚さ15～25cm)で、多量のにぶい黄橙色～にぶい黄褐色あるいは黄褐色～明黄褐色の砂状浮石粒(中撤浮石)を含む。

IVb層は淡黄色～明黄褐色を呈する砂状の中撤浮石層(5000～5500B.P.)で、IV層中に浮

石砂塊となって断続する。

V層は黒褐色～暗褐色の粒性に富むシルト状土層（厚さ10～30cm）で、砂粒大の浮石粒や岩片を多量に含むほか、粒径が数mmの黄橙色浮石や数～20mmの灰白色浮石が散在する。

VI層は黒褐色～暗褐色の粘性に富むシルト状土層（厚さ10～25cm）で、南部浮石層中の浮石や砂状浮石粒をところによってかなり密に、ところによってやや疎らに含んでいる。

VII層は南部浮石層（厚さ60～100cm、8600B.P.）である。灰白色～明黄褐色～黄褐色の浮石の密集層で、下方ほど灰白色浮石が多く、上方ほど明黄褐色～黄褐色の浮石が多い。浮石の粒径は1～2mmから30mmのものがふつうで、最大40～50mm程度の浮石が含まれる。浮石粒の間隙には、それを埋めるように砂状岩片や砂状浮石がつまっている。上部はVI層に遷移する。

VIII層は暗褐色のシルト状土層（厚さ5～30cm）で、粒径0.5～4mmのにぶい黄橙色浮石が大量に含まれ、また粒径2～15mmの灰白色～にぶい黄橙色の浮石粒が散在する。

IX層は砂状の浮石粒や岩片を多量に含む暗褐色シルト質砂状の土層（厚さ0～30cm）で、そのほかに粒径1～5mmの赤褐色浮石粒や粒径4～10mmの灰白色～にぶい黄橙色の浮石粒が点在する。上半には直径4～10cm程度のにぶい黄褐色で砂質のシルト状土塊が目立ち、部分的には下半にも同様の土塊がある。IX層の上半は全体としてその色調は暗い。

X層は粘性に乏しいにぶい黄褐色を呈するシルト状の砂質土層（厚さ0～25cm）で、IX層にみられる浮石粒と同様の粒径1～4mm程度の浮石粒な岩片を多量に含んでいる。

XI層はシルト質で砂状の褐色土層（厚さ0～40cm）で、粒径1mm前後の浮石粒を多量に含み、また粒径2～10mm程度の灰白色～にぶい黄橙色の浮石が点在する。

XII層は砂質でシルト状の灰黃褐色土層（厚さ0～40cm）で、粒径3～10mmの灰白色～にぶい黄橙色浮石が散在する。

XIII層は八戸火山灰層上部にあたる砂質の黄褐色粘土質火山灰層（ローム、厚さ15～50cm）で、粒径1～3mmの灰白色～黄橙色浮石および青灰色～灰黒色の岩片を多量に含み、さらに粒径5～30mmの灰白色～にぶい黄橙色浮石が下方ほど多量に混在する。

XIV層は灰白色浮石質火山灰と浅褐色シルト状火山灰の互層（厚さ10～30cm）で、八戸火山灰層（12000～13000B.P.）に当たる。

XV層は厚さ数cmの黄褐色粘土質火山灰層（ローム）で下位火山灰層の風化帯に当たり、上限付近は乳色を帯びところどころに黒色の炭質物が集まってうすい黒色帯となっている。

XVI層はおおむね黄褐色粘土質火山灰層（ローム）で、高館火山灰層（～20000B.P.）に当たる。

以上に述べたもののほか、いくつかの遺構の覆土中には灰白色～にぶい黄褐色のシルト状火山灰層がみられ、遺構内部に垂れ下がるような状態で中心部で厚くなるが、これは十和田a降下火山灰層（915A.D.一新井房夫・町田洋ほか、1986）に相当する。

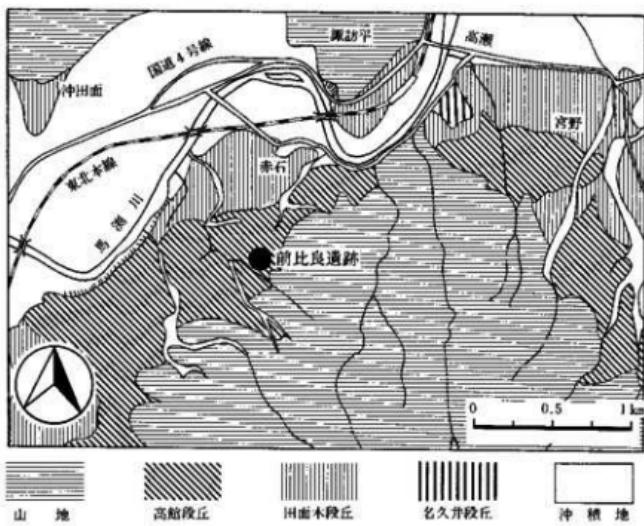


図4-1 遺跡周辺の地形五分図

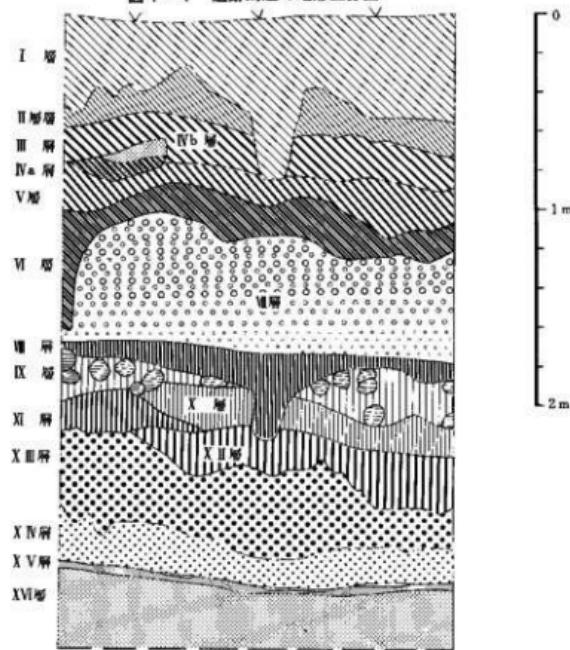


図4-2 標準土層
(発掘されたグリッド壁の1例)

第Ⅲ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

遺跡は名久井岳から北西方向に延びる小さな馬背状台地の西斜面に立地している。南北に延びる現農道を丘陵の尾根とし、その東西に広がる斜面が調査の対象地である。調査の便宜上、この西側の斜面をA区、東側の斜面をB区と呼称した。これまで行った数回の分布調査では、この東・西の各斜面から縄文時代中期・晚期の遺物を採集しており、当該期の遺物包含層を含む集落跡の存在が予想された。

調査対象地域は、長さが約80m、幅は法面も含むためやや広くなり22mの範囲である。調査設定にあたっては建設予定の道路中心杭No.47を原点とし、更にこれとNo.46を結ぶ線を基準線として各グリッドを設定した。グリッドは4m×4mで、その呼称は原点AをN-100とし、東西にアルファベット、南北に算用数字の組み合わせたものを用いた。

調査にあたっては、縄文時代中、晚期の遺物包含層（捨場）の検出が予想されたので、傾斜地における層位的調査の有効な方法であるトレンチ方式を探った。このため斜面に添って各グリッドを東西に長く連結したトレンチを設けた。

遺構の精査は、住居跡等の比較的大型の遺構は4分法、小型の土壙や溝状ピットについては2分法による分層発掘で行うことを基本とした。

遺構の実測（平面図、断面図）は簡易造り方及び平板測量によった。また縮尺は20分の1を基本としたが、かまどの細部や遺物出土状況等は10分の1とした。

遺構及び遺物の出土状況についての写真撮影は、35mmのカラースライド、ネガカラー、モノクロームの3種類を用いた。

(三浦圭介)

第2節 調査の経過

昭和61年4月27日、発掘調査のためのプレハブと仮設トイレを建て、翌22日午前には調査器材を現地に搬入した。

同日の午後には、南部町公民館会議室において関係各機関、調査員、当埋蔵文化調査センター職員による発掘調査についての打ち合せ会議が開催された。会議では県営三戸地区広域営農団地農道整備事業及び発掘調査の概要説明の後、調査方法などについて協議した。

4月23日から現地作業に入った。雑草及び雑木の刈払いや除去等、調査のための環境整備を行い、その後遺跡の全景写真撮影を行った。

グリッド設定作業及び粗掘り作業は4月24日から開始した。遺構及び遺物包含層が予想されるA地区から始めたが、この地区的西側約半分は、長芋栽培のためのトレッチャによる幅20cmの縦状の擾乱溝が無数に走っていることが確認された。

粗掘り開始から1週間後の4月30日には、調査区L～K-104～105から古代の竪穴住居跡と推定される黒色土の落ち込みが確認された。これを第1号竪穴住居跡と命名し、精査作業を開始した。その頃には少量ではあるが奈良時代の土師器片も出土はじめた。

5月上旬には第2号竪穴住居跡や土壤、溝状ピットも確認され、その精査に入ったが、基本層序第VII層の南部浮石層と第VII層の黄褐色ローム層との層理面での地滑りのため、土壤及び溝状ピットの各遺構が途中で切断されていることが判明した。したがって、各遺構の精査は、上部と下部の2回に分けて行う必要が生じた。

この後、各遺構の確認や精査作業、B地点を含む粗掘りの各作業が続行された。第1号竪穴住居跡と第2号竪穴住居跡はいずれも遺存状態は極めて悪いものの、焼失家屋であることが明らかとなった。

調査も佳境に入った5月下旬にはA地区のQ-94区で遺存状態が極めて良好で、しかも大型である第3号竪穴住居跡を確認した。この住居跡は十和田a降下火山灰層に覆われていることや、他の2軒の住居跡の精査結果から、他と同様、奈良時代の焼失家屋であることが想定された。精査に要する期間が長期に渡ることが予想されたため、直ちに精査に入った。この結果5月下旬には床面上から多量の炭化した家屋材や生活用具が検出された。

この後、6月16日まで各遺構の確認及び精査作業が続けられ、奈良時代の竪穴住居跡3軒(いずれも焼失家屋)、貯蔵庫と推定される竪穴遺構1基、縄文時代の土壤10基、溝状ピット6基の各遺構を検出した。

その間、5月28日には南部町文化財審議委員会及び同町誌編纂委員会、5月31日には南部町ふるさと歴史講座受講者、6月12日には南部町立平良ヶ崎小学校4～6年生による現場視察及び遺跡見学が行われ、6月17日には全作業を終了した。

(三浦圭介)

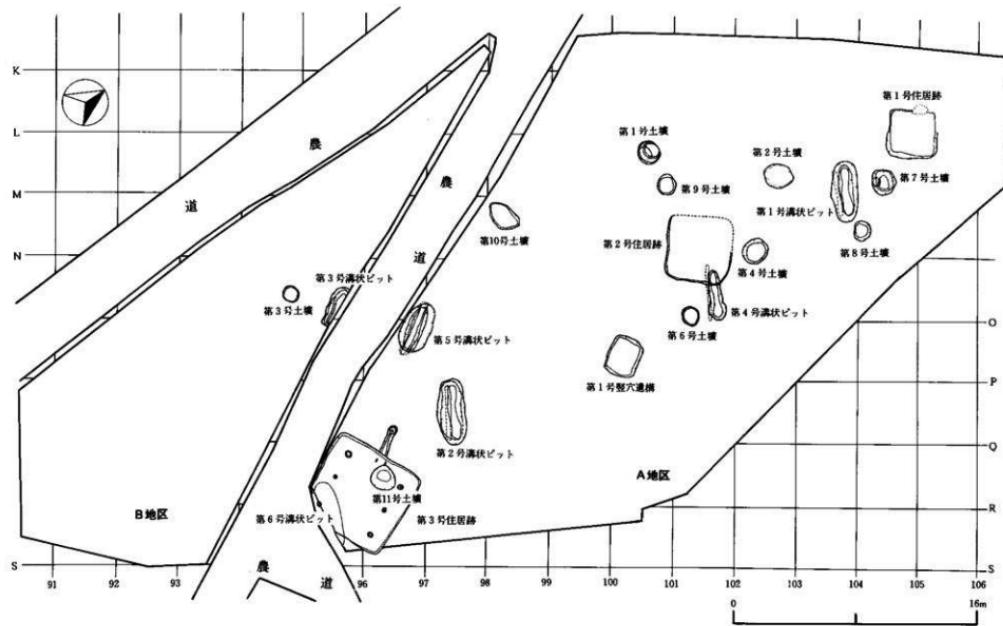


図 6 前比良遺跡遺構配置図

第IV章 検出遺構と出土遺物

第1節 奈良時代の堅穴住居跡と出土遺物

第1号堅穴住居跡 図一7

【位置と確認】 調査区K～L-104～105に位置する。馬の背状台地の東側斜面で、傾斜が緩い地点である。遺構が立地する周辺は蔬菜畑だったため、第I層～VI層までの大半が擾乱されていた。この土を除去した時点で、第VII層（南部浮石層）上面で暗褐色の方形の落ち込みを確認した。検出した遺構の中では、最北端であり傾斜面の最低位に位置する。

【平面形・規模】 遺構の大半は、長芋栽培用の掘削機（トレントナー）によって、裁断されており、遺存状態は良くないが、残存する部分から、1辺が3.3mの隅丸方形の堅穴と思われる。床面積は7.8m²と推定される。主軸方向は、N-68°-Wで、台地の傾斜に直交する形で構築されている。

【壁】 僅かに残在する東壁からは、第VII層（南部浮石火山灰層）を約70cm程掘り込んで壁としている。壁は、やや急な立ち上がりであり、壁面は脆くて崩落しやすい。

【床面】 かまどを境にして北側半分（傾斜面の低位側）には、中撒浮石火山灰と黒色土の混合土が厚さ5～15cm程度に貼り床され、床は全体として平坦に踏み固められている。また、北東隅一帯には、割板状の炭化材が散在して検出されたことから、本住居跡は、焼失家屋と思われる。

【柱穴】 残存している範囲内には、存在しなかった。

【かまど】 北西側壁中央よりやや北寄りに、かまど跡と思われる焼土および安山岩礫が廃棄された状態で検出された。焼土は58×103cmの規模で、中央に袖石（袖の芯材）として使用したと思われる安山岩礫及びそれを覆う形で白色粘土が堆積していた。この位置は、第2号及び第3号堅穴住居跡のかまどが構築されている北西壁と同方向にある。

【堆積土】 自然堆積状態で、3層に区分できた。いずれも黒色系のシルト質土層で、床面に近づくにしたがって、南部浮石の混入量がふえる。

【出土遺物】 1層から土師器甕（図一8）が出土した。口縁部はナデ、胴部外面は縦位ハケメ、内面は横位のハケメ調整が施されている。また、頸部には2段の沈線が巡る。8世紀ころのものであろう。

（赤平智尚）

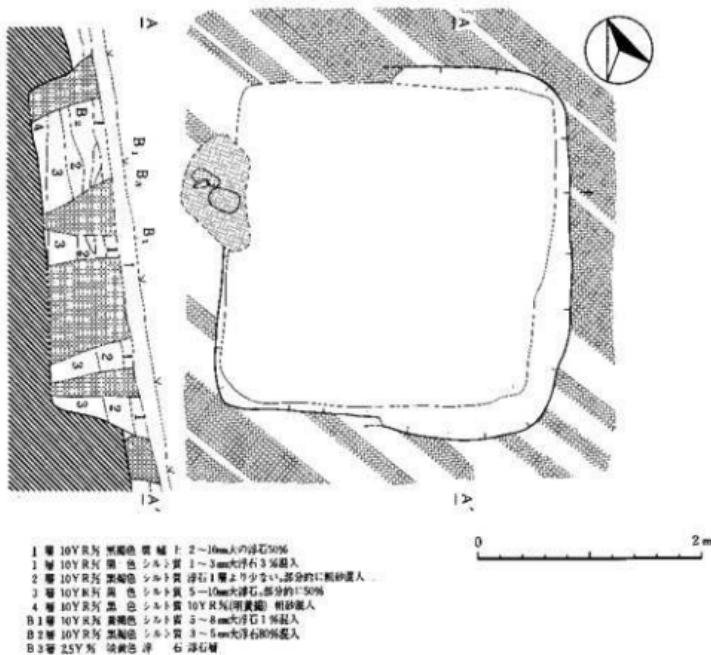


図7 第1号堅穴住居跡



図8 第1号堅穴住居跡出土遺物

第2号竪穴住居跡

【遺構の確認と位置】 調査区M—101区の第Ⅰ層（耕作土）を剥いた時点で木炭が多量に分布する場所を検出した。この位置は、馬背状丘陵の北側斜面中腹である。この斜面一帯は、調査直前まで長芋栽培が行われており、トレンチャー（長芋栽培に使用する機械）によって掘り起こされた幅20cmの多数の溝（擾乱層）が存在する地点である。

【平面形・規模】 竪穴住居跡を検出できたのは住居の南東壁・南西壁のみである。黒色土層中に床面が構築されていることと、畑の耕作によって竪穴の上部がほとんど削平されたために、竪穴の一部と床の一部を検出できただけとなった。残存する部分から推定すると、一辺4m程の隅丸方形の竪穴住居跡と思われる。

【壁】 検出できた壁高は2～5cmにすぎなく、詳細は不明である。

【床面】 床面の約3分の2は長芋用のトレンチャーによって破壊されており、遺存している床面も平行する縞状になっているため、細部については不明な点もあるが以下にその概略を記す。

基本層序第Ⅱ層を平坦に削平し踏み固めている。床中央部には赤褐色に赤変した部分が約1

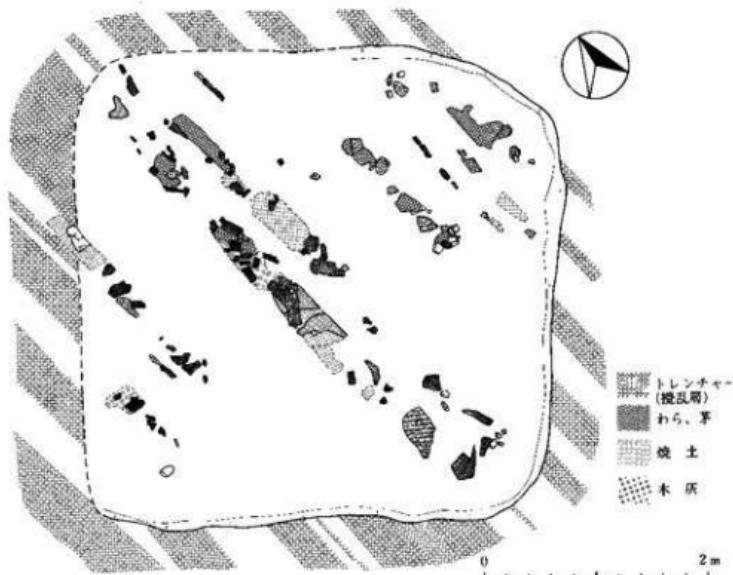


図9 第2号竪穴住居跡

m²検出された。火災によって焼土が形成されたものであろう。

【柱穴】 縞状に残存する部分では検出できなかった。したがって、当初から竪穴内に柱穴が存在するかどうか不明である。

【かまど】 かまどと断定できる遺構は検出できなかつたが、北西壁の想定できる位置に、やや厚さのある焼土と火熱を受けたシルト岩が1個検出された。かまどの火床部と、袖の芯材に使用した大礫であろう。この位置は想定される北西壁のほぼ中央部にあたる。

【堆積土】 竪穴住居跡内の堆積土は床面を覆っている黒色土が1層である。

【出土遺物】 床面直上からは多量の炭火物が出土した。これには丸太材、板材、角材等の木材や、茅状のものや稻ワラのようなものがある。各々の炭化物はトレンチャーによって切断され本来の形状をとどめていないため、上屋構造のどの部位の材か想定が不可能になっている。しかし、南側のコーナー近くの床面上で検出された稻ワラ状の炭化物は、明らかに編んだものである。この編み方は2~3本の稻ワラ?を1単位とした網代編である。床の敷物の断片であろう。

この他、土師器甕の破片も12片出土した。細片のため細部の特徴を知ることができないが外に刷毛目調整がみられることから8世紀代のものと言えよう。

(三浦圭介)

第3号竪穴住居跡

【遺構の確認と位置】 調査区R-96の基本層序第III層を掘り下げ中に確認した。この地点は、名久井岳から北東に延びる馬背状丘陵の背部（高位面）に位置する。

【重複】 本住居の南東コーナー付近で第6号溝状ピットと重複している。本住居跡が新しい。

【平面形・規模】 南東コーナーの一部が道路直下に位置するため調査不可能であった。このため、南壁辺、北壁辺の長さが明らかでないが、それぞれ北壁辺、西壁辺に対応するものであろう。北壁辺6m45cm、東壁辺5m70cmで東西方向に長い長方形の竪穴である。

【壁】 住居確認面から床面までは30cm前後あり、基本層序第II層（黒色）、第III層（暗褐色）、第VII層（南部浮石）の各層を掘り込んでいる。このうち、第VII層の南部浮石層は粒径10mm前後の浮石單一層であるため崩落が激しい。このため、壁崩落の土留用施設（周溝）が想定されたが検出するにはいたらなかった。

【床面】 床面は全体にわたってほとんど平坦である。第VII層の南部浮石層を削平した後、浮石が動かないように黒色シルト層を薄く貼って固定している。かまど前庭部が最も堅緻である。また本住居は火災住居のため、床面上の数箇所で薄い焼土が検出された。

【柱穴】 堪穴内で検出されたピットは10個である。このうちP₁・P₃・P₄・P₆の4個が深さ32~49cmと、他のものに比較すると深い。また、これらは各々の対角線上の各コーナー寄りに位置することから柱穴と見られる。この他P₂、P₅はそれぞれP₁—P₃、P₄—P₆の線上で、しかもその半程に位置することから、この2個も桁の支柱としての機能をもつたものであろう。これらの中で、柱痕跡が確認できたのはP₁、P₄、P₆である。P₁の柱痕跡は短辺7cm長辺20cm程の短冊形をした断面である。割板状に成形した柱であろう。P₆のものは、断面が台形状の割材である。また、P₁・P₃は、VII層とVI層の層理面で地滑りを起こし中位で切断されている。

Pit 計測一覧表

Pit No	規模(cm)	深さ(cm)	備考	Pit No	規模(cm)	深さ(cm)	備考
1	40×40	49	柱痕確認 上部円形・下部方形	6	30×37	40	柱痕確認
2	20×20	12		7	31×39	15	
3	24×26	32		8	45×(40)	13	
4	30×32	46	柱痕確認	9	26×31	11	
5	25×34	20		10	20×22	6	

【かまど】 北西壁辺の真中に設置されている。本体は扁平な安山岩（左袖石5cm×22cm×27cm、右袖石6cm×25cm×33cm）を左右袖の芯材とし、その周囲及び天井部を黄褐色の粘土で覆った構築方法を用いている。この芯材の内側は直接燃焼部の内壁となっており、火熱によつて赤変している。内壁間の距離は26cmで火床面から芯材の高さは約20cmである。これが使用時のかまどの規模であろう。

煙道部は半地下式の構造で、壁外に長く延びる。天井は本体と同様の黄褐色粘土を貼っている。全長は200cmで煙道底面は煙出孔に向ってやや下降する。煙出孔底部は深く掘り込まれている。雨水の浸入を防ぐためであろう。

【堆積土】 堪穴内の堆積土は、貼り床層（5層）、住居廃棄後の自然堆積層（2、3層）凹地に廃棄された南部浮石とローム層混入の入為堆積層（1a、1b、1c、1d層）に大別される。この他、図面上では表現されていないが、I a層の上部には厚さ約10cmで、十和田a降下火山灰層（10c前半期の降下物と推定、三辻利一氏が分析同定している）が全体に渡って堆積している。

【出土遺物】

炭化材：堪穴内からは土師器壺、壺、砥石、鉄製品の他、多量の炭化材が出土した。この炭化材は、床面上を覆っているもので、家屋材の一部が火災のため炭化した状態で遺存したもの

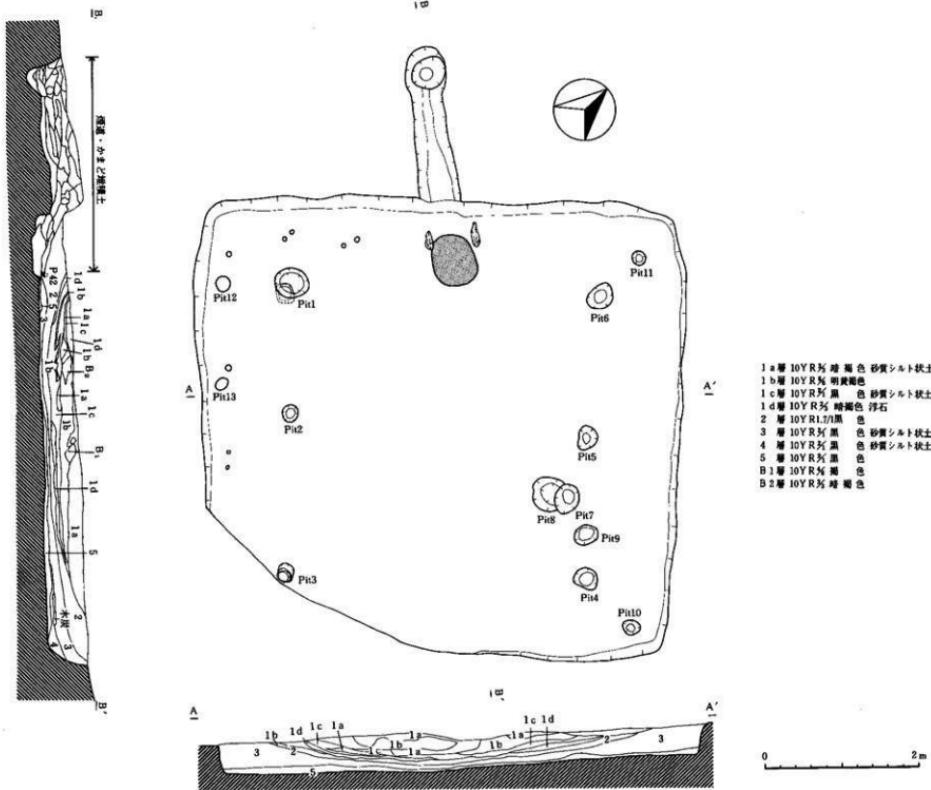
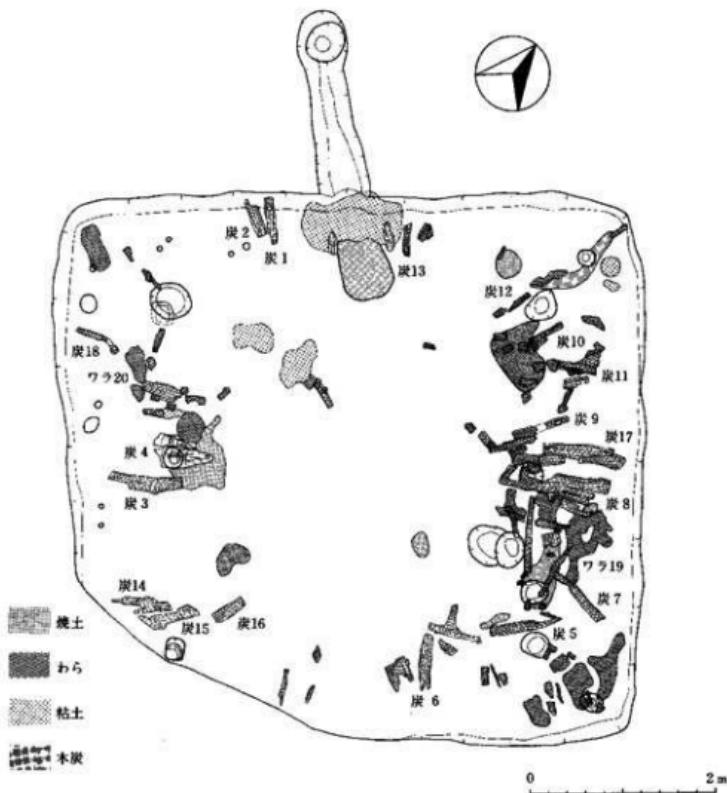


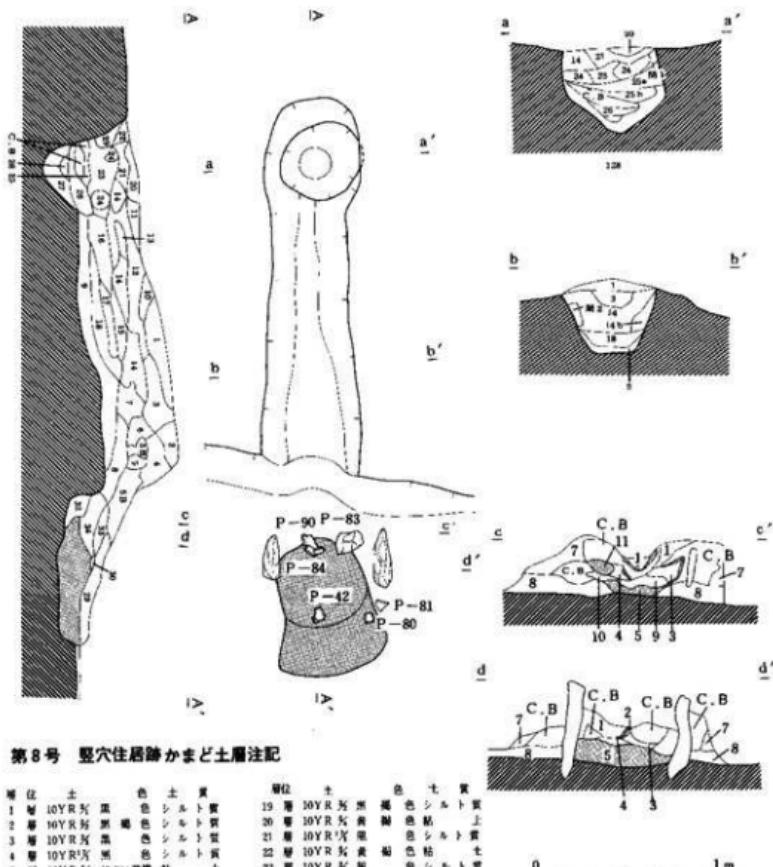
図10 第3号竪穴住居跡(1)



炭化材樹種同定一覧 (鳴倉巳三郎氏による)

番号	樹種	層位	備考	番号	樹種	層位	備考
1	コナラ	3(床底)		11	コナラ	3(床底)	
2	コナラ	*	写真1	12	コナラ	*	
3	コナラ	*		13	コナラ	*	
4	コナラ	*	写真2	14	コナラ	*	
5	ヤチダモ	*	写真4・5・6	15	コナラ	*	
6	コナラ	*		16	コナラ	*	(細片化)
7	コナラ	*		17	コナラ	*	写真3
8	コナラ?	*	(特 性)	18	コナラ	*	
9	不明	*	(特殊細片化)	19	イネ科植物の1種	床	
10	コナラ	*		20	イネ科植物の1種	*	

図11 3号竖穴住居跡炭化材出土状況と樹種



第8号 穫穴住居跡 かまど土層注記

層位	土	質	色	土	質	質	色	土	質	質	色
1	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
2	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
3	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
4	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
5	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
6	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
7	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
8	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
9	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
10	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
11	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
12	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
13	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
14	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
15	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
16	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
17	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒
18	10YR 4/2	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒	10YR 4/2	重	重	黒

図12 第3号 穫穴住居跡 かまど

である。これには、丸太材、角材、板材、茅材等がある。

これらはP₁～P₆と結ぶ線上の外側に分布している。角材、丸太材の多くは竪穴の中央部方向に向いている。これらの材木の上下には茅状（ススキ、稲ワラ2種類の可能性が高い）の炭化物も多く検出された。なお、南東コーナー床面上で検出されたものは網代状に編んだものである。床面上の敷物の残片であろう。他の大部分は屋根材の可能性が高い。

上記の炭化物の樹種同定では第VI章第1節「前比良遺跡出土の炭化木……嶋倉巳三郎」の結果を得た。これでは、やや大型の炭化木のほとんどはコナラで、一部にヤチダモがあるにすぎない。この大型の炭化木は出土状況等から、柱材、梁、桁材、垂木材等の上屋構造の骨格をなしたものであろう。

土師器：土師器は甕、壺が比較的多く出土したが、大部分は床面直上のものであり、竪穴廐

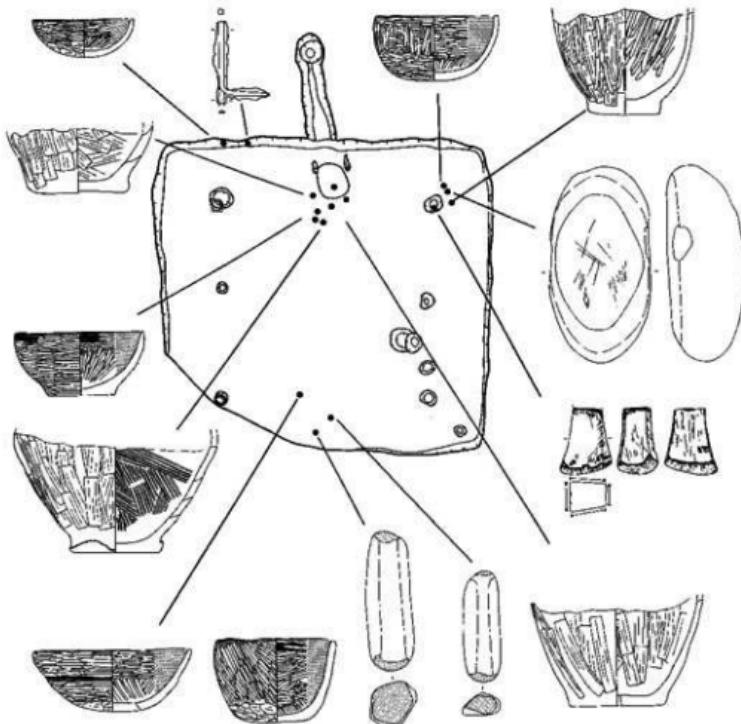
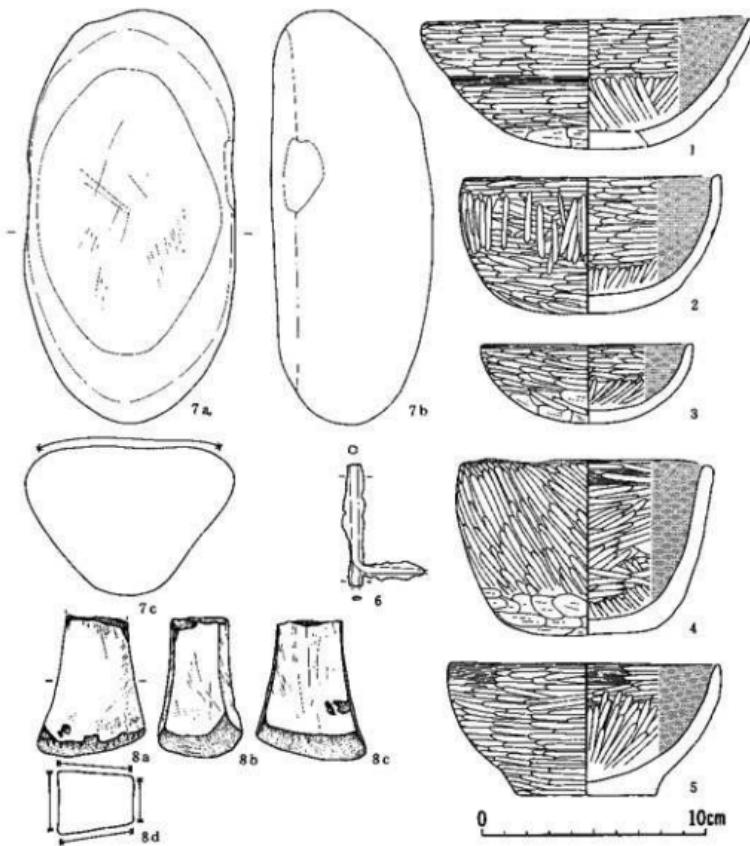


図13 第3号竪穴住居跡遺物出土分布



土器器観察一覧

番号	地区・層位	形状	層位	外観	内観	調査者	鉢縁番号
1	3H・底面	円形	略次世	底面ケズリ・上部ミガキ	ミガキ	内面黒地	No. 9
2	3H・底面	16	末次世	体部に複数の横線・企囲ミガキ	ミガキ	内面黒色	No. 7
3	3H・底面	杯	末次世	下部底ケズリ・上部ミガキ	ミガキ	内面黒地	No. 8
4	3H・底面	22	末次世	底面ケズリ・体部ミガキ	ミガキ	内面黒色	No. 6
5	3H・底面	23	末次世	口縁部テナ・体部ミガキ	ミガキ	平底、底地	No. 1

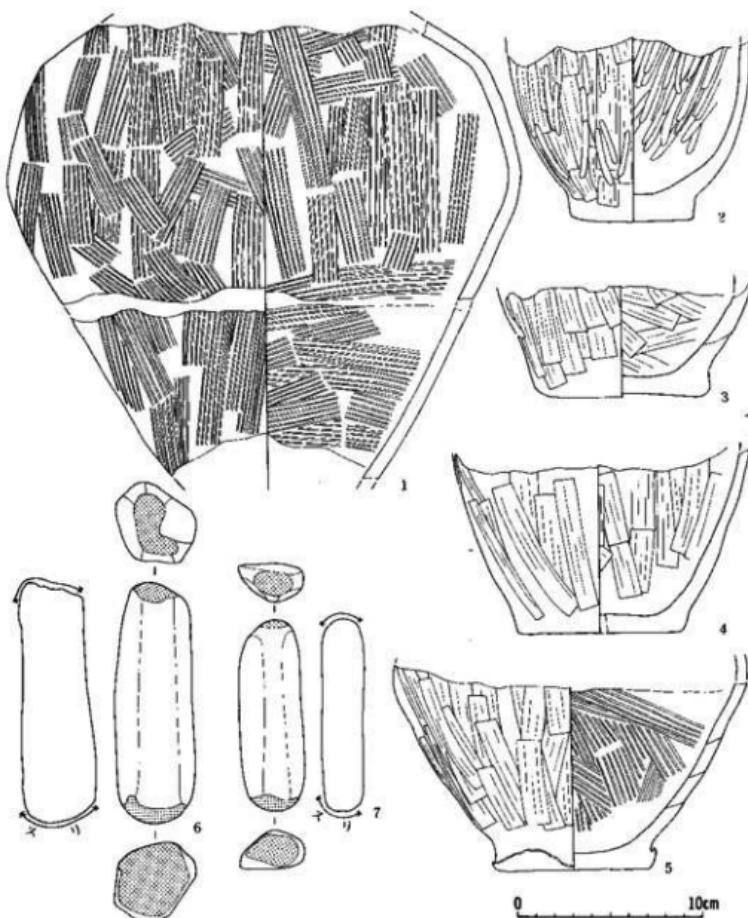
鐵製品観察一覧

番号	地区・層位	形状	層位	外観	内観	調査者	鉢縁番号
6	3H・北壁	不明	不明	断面4mm×4mmの方形	「又に分かれている」	Fe-1	

砥石観察一覧

番号	地区・層位	形状	層位	外観	内観	石質	鉢縁番号
7	3H・米湯	砥石	末次世	1面	1面	燧灰岩	S-86
8	3H・pt. 6	砥石	末次世	4面	4面	鶴羽岩	S-87

図14 第3号竪穴住居跡出土遺物(1)



土器・石器類一覽

番号	地区・層位	器種	部位	外 面	内 面	備 考	登録番号
1	地区・層位	甌	胴上部	ハケメ	ハケメ	球 刷	No.3
2	3H・床面	甌	胴下部	ヘラナデ後一部ミガキ	ミガキ	小 型	No.2
3	3H・床面	甌	胴下部	ヘラナデ	ヘラナデ		No.5
4	3H・床面	甌	胴下部	ヘラナデ	ヘラナデ		No.6
5	3H・床面	甌	胴下部	ヘラナデ	ハケメ		No.12
6	3H・床面	磨 石	光 形	磨面は滑らかな摩擦痕、使用痕無、スリコギとして使用?			3HS.5
7	3H・床面	磨 石	完 形	磨面は滑らかな摩擦痕、側面は使用痕無、スリコギとして使用?			3HS.6

図15 前比良遺跡第3号竪穴住居出土遺物(2)

棄直前時の一括資料と言える。出土状態を見ると、かまど前庭部のブロックと、主柱穴を結ぶ各線の外側、(北東壁寄り)のブロックに大別される。甕は焼失家屋のためか、完形のものはなく胴下半のものが多い。

壺：5個体出土した。いずれもロクロ未使用のもので図14—1以外は略完形である。図14—2は小型のポール状で底部は丸底である。口縁部が内湾するため、全体的には半球状である。外面の体部上位に1条の浅い沈線が途切れ途切れに巡る。外面調整はケズリの後粗いミガキを施している。このため、体部下半にはケズリの痕跡が比較的多く残る。内面は入念なミガキの後黒色処理を施している。

3は丸底の浅い小型の壺である。底部から湾曲しながら立ち上がる。外面には段、沈線は認められない。外面調整はケズリの後、体部上半を密なミガキ、下半を粗いミガキである。このため下半部にはケズリの痕跡が一部に残る。内面は入念なミガキの後黒色処理している。

4は小鉢状の深い壺である。底部は平底風丸底である。外面は底部を含めて全体がケズリで整えられ、後に体部をミガキによって調整している。内面は軽いナデによって整えた後粗いミガキを施している。しかし、このミガキは間隔が粗く、しかもミガキ残しの部分が多いため、浅い沈線の集合体の様相を呈する。このミガキの後黒色処理を施している。

1は丸底で体部が大きく外反する器形である。体部上位で軽い段をなす。この段に対応した位置の内面にも軽い段が認められる。体部下半から底部にかけてはケズリの後軽いミガキ、段の上位は横位のミガキが施されている。内面は入念なミガキの後黒色処理が施されている。

5は完全な平底である。底部が厚い。内外面共沈線、段等は無い。体部はナデの後軽いミガキを施している。内面は入念なミガキの後黒色処理が施されている。

甕：7個体出土したが完形、完形に近いものはない。ほとんどの破片は床面及び初期堆積土中からの出土である。体部上半が欠損しているものが多い。体部下半のみで使用していた可能性もある。

図15—1は大型甕の体部下半から底部にかけてのものである。外面は縱位方向の細いハケメ調整、内面は同一工具による調整である。外面のように規則性がない。

2は下脹状の小型甕の下半部である。底部は小さいが厚目に成形されている。外面及び内面はミガキ風ナデによって調整されている。

4は長胴甕の体部下半である。外面はハケメの後ナデ、内面はナデの調整を行っている。なお底部外面には木葉痕が見られる。

5は大型の球胴甕の下半部である。他のものに比し、体部径の割に底径が大きい。調整は外面はヘラナデ内面はハケメである。

石器：石器は砥石2点、すりこぎ状の磨石2点が出土した。

図14—8はP₆の堆積土中からの出土である。4面使用の金砥石で半分ほど折損している。
相当使用されたもので折損ヶ所はやせ細っている。石材は細粒凝灰岩である。

7はP₆に隣接した床面上からの出土である。1面使用の金砥石でこれも細粒凝灰岩である。

図15—6は棒状の珪化木の両端をすりこぎのように使用した石器である。径の大きい方が摩耗度が激しい。7も同様の石器である。2点共南東壁寄りの床面及び初期堆積土中の出土である。

鉄器：鉄器は1点出土した。断面が四角形の釘状のものであるが製品名、性格等は不明である。一部で二又になっている。北西壁の壁面からの出土である。

(三浦圭介)

第2節 奈良時代の竪穴遺構と出土遺物

第1号竪穴遺構

【遺構の確認と位置】 丘陵の北斜面上で、第2号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡の中間で検出された。調査区P-100の第III層で十和田a降下火山灰が厚く集中する部分が検出された。この降下火山灰は第3号竪穴住居跡の最終堆積土として検出されたものと同一である。

【平面形・規模】 長辺2.5cm、短辺2.0cmの長方形の竪穴遺構である。確認面から底面までの深さは110cmである。竪穴内の最終堆積土である十和田a降下火山灰の状況からみて、この深さは構築当初に極めて近いものと思われる。

【壁・床】 南部浮石層とその上層の黒色腐植土層を直接壁面に使用しており、腰板等の痕跡は無い。床は南部浮石層を削平し、直接使用している。

【堆積土】 1層は十和田a降下火山灰で竪穴のはば全面を覆う。3層～12層までは黒褐色土と南部浮石層の混合層で、その割合によって細分されたにすぎない。サンドイッチ状の堆積状態を示す。11層、13層、17層は黒色腐植土層が主体の層である。

【出土遺物】 11層中から土器器壺の細片が1片出土したにすぎない。

【時期と性格】 十和田a降下火山灰（10世紀初頭に堆積）が一次的堆積であり、しかも遺

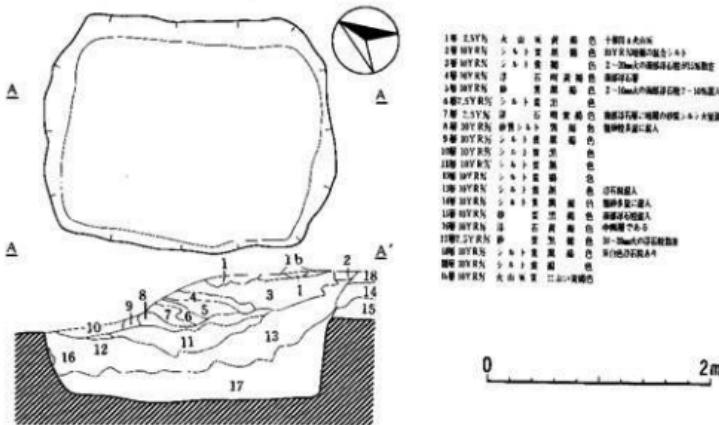


図16 第1号竪穴遺構

構の最終堆積土となっていること。出土した土器片が奈良時代のものであることから、10世紀以前で、しかも奈良時代を含むそれ以降のものとして把握される。

また、遺構の機能、性格を推定できるものは検出できなかったが、位置、形状、規模等から第2号住居か、第3号住居に付随する食料貯蔵庫の可能性が高い。

(三浦圭介)

第3節 繩文時代の溝状ピット

馬の背状台地の東側斜面を中心に、溝状ピットやT（トラップ）ピットなどと呼称されている遺構を6基検出した。遺構が立地する区域は、長芋畑として利用されていたため、表土からVI層までが削平または攪乱されており、ピットの掘り込み層位を明確にできなかった。

第1号溝状ピット 図17 写真6-4

検出された溝状ピットの中では最も北のL～M-103に位置する。基本層序第I層を掘り下げ中に暗褐色の落ち込みを確認した。当初、南部浮石火山灰層（第VII層）の最下部で非常に堅く締まりの強い面（第VII層上面）があり、底面と思われた。しかし、南側（土地の傾斜の高方位）の一部に黒色土の落ち込みがあり掘り上げた結果、切断された下半部が現れ、本丘陵における地滑りの存在が確認されるに至った。その規模は、北方向へ48～65cmずれている。長軸（上端）の長さは391cm、深さは212～235cmで、開口部の平面形態は、中央部がやや広がる細長い楕円形である。長軸の断面形状は、やや上端が広がるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。短軸の断面形状は、開口部から中位までは緩く傾斜し、そこから底面に向かってはほぼ垂直に掘り下げられる「Y」字状を呈する。堆積土は13層に区分可能で、自然堆積状態を示す。主軸方向は、真西から12°北方向を向いている。

第2号溝状ピット 図17 写真6-3

P～Q-97に位置する。第II層中から掘り込まれ、第IV b層（中揮浮石層）～第VII層（南部浮石層）、さらには底面は第XIII層（八戸火山灰層）まで達している。ピット中では、最も深く掘り込まれている。長軸の長さは、425cm、深さは、257～270cmで、開口部の平面形態は、幅が広く細長い楕円形を呈する。長軸の断面形状は、両壁面が中位に向かって直線的に狭くなり、さらに底面に向かって外方へ広がっている。短軸の断面形状は、1号と同じく「Y」字状を呈する。このピットも1号と同じく地滑りによって、下半部が切断されており、その規模は、北北東方向へ20cmである。堆積土は自然堆積状態を示すが、開口部から中位にかけては小規模な

崩落があったと思われる。主軸は、真西から17°北を向いている。

第3号溝状ピット 図18

馬の背状台地の頂上部付近、N-95に位置する。東側半分は農道に係るため発掘はしなかつたが、調査した西側部分からその概要を把握できた。本遺構は、基本層序第II層を掘り下げ中に、黒褐色の落ち込みとして確認した。長軸（上端）の長さは276cm、深さ125～140cmで、開口部の平面形態は、幅が広く、ずんぐりした楕円形を呈する。長軸の断面形状は、開口部が底面より広く、袋状を呈する。遺構を覆う堆積土は15層に区分可能で、底面から50～90cmは人為堆積状態を示す。また、その上は自然堆積状態で、特に掘り込み面である第II層上面には、十和田b降下火山灰が、薄く帯状に堆積している。主軸方向は、北から41°西に向いている。

第4号溝状ピット 図18 写真7-1

調査区のほぼ中央部、N-101に位置する。第I層を掘り下げ中に、円形の落ち込みとして確認した。当初、開口部が南部浮石火山灰によって覆われており、溝端の落ち込みを第5号土壤として精査したが、土壤の底面が北方向に延びており溝状ピットとなったものである。長軸の長さは321cm、深さは176～199cmである。開口部の平面形態は、両端がややひろがる鉄アレイ型を呈する。長軸の断面形状は、開口部からピット中位まではほぼ垂直に掘り下げられ、そこから底面に向かい「ハ」字状に開いて傾斜する。短軸の断面形状は、上半分が地滑りのため南部浮石火山灰とロームとの層理面で北東方向へ約40cmズレ落ちているが、構築時は、開口部から底面にむかって次第に幅を狭くする「V」字状を呈すると思われる。堆積土は10層に分かれ、自然堆積状態を示す。黒褐色シルト質土が主体で、下層にしたがって、黄褐色または灰褐色の浮石の混入量が増す。第2号堅穴住居跡の東側壁で重複しており、本遺構が古い。長軸方向は、真西から18°北方向を向いている。

第5号溝状ピット 図18 写真7-5

馬の背状台地の頂上部付近、N-0-96～97に位置する。長軸の長さは333cm、深さは175～213cmで、開口部の平面形態は、幅が広く長い楕円形である。長軸の断面形状は、開口部から中位に向かい緩く傾斜し、中位で最も幅が狭くなり、さらに底面に向かって「ハ」字状に開いて傾斜する。短軸の断面形状は、底面付近がやや膨らむ袋状を呈するが、堆積土17層は崩落した可能性もあり、構築時は「Y」字状と思われる。底面は、灰白色の八戸火山灰層を掘り込んでおり、両先端部が膨らんでやや内湾している。堆積土は人為的な埋め戻しと思われる。主軸方向は、N-45°Wで北西方向である。

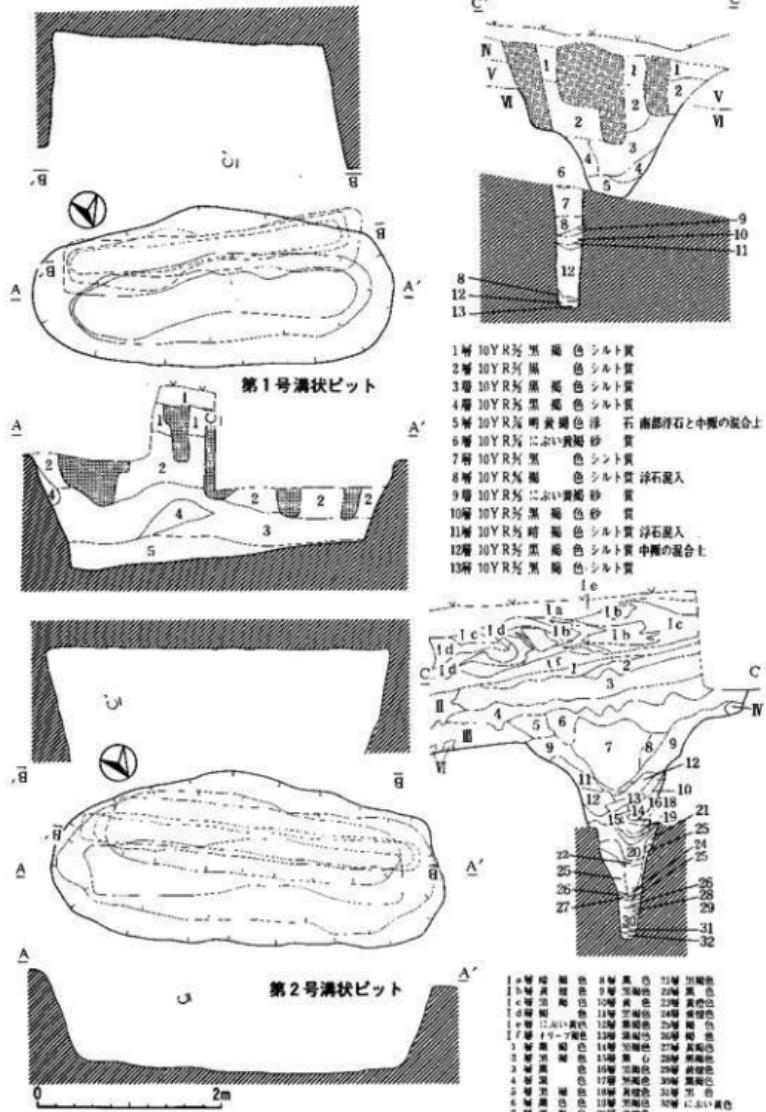


図17 溝状ピット (1・2号)

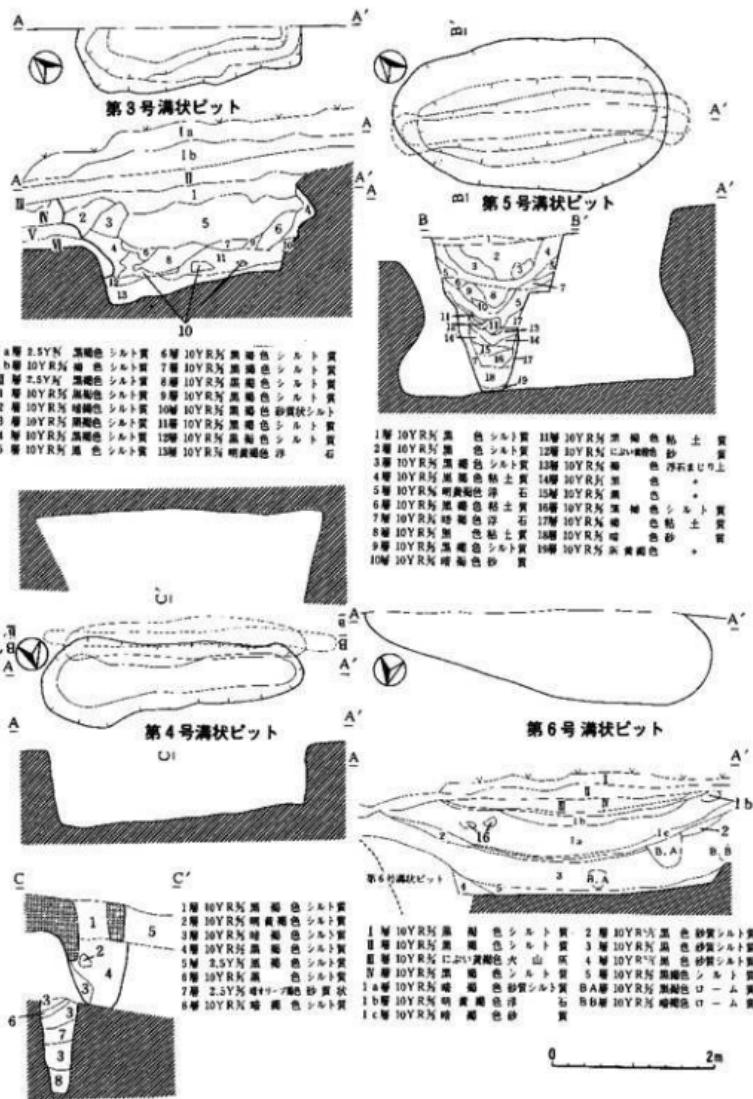


図18 溝状ピット(3~6号)

第6号溝状ピット 図18

馬の背状台地の高位面、Q～R-95に位置する。第3号竪穴住居跡南側床面を精査中に、暗褐色の落ち込みとして確認された。掘り込み面は第Ⅲ層で、上面は十和田a降下火山灰に覆われている。第3号竪穴住居跡が構築された時点では、落ち込み部分に貼り床されており、本遺構が古い。調査したのは北側半分のみで、南側半分は調査区外に延びるため、プランを確認したに留めた。長軸方向は、真西より3°北方向に向いている。ただし、第3号住居跡の主柱穴であるピット1、3が南部浮石火山灰とロームとの層理面で地滑りを観察できることから、本遺構も構築時の長軸方向は、もっと西方向に向いていたと思われる。

(赤平智尚)

第4節 繩文時代の土壙 図19～20 写真5～6

全部で10基検出した。いずれも、円形ないし不整円形で第VII層（南部浮石火山灰層）を掘り込んでおり、深いものは第VI層のロームまで達している。第11号土壙以外はすべて単独で検出され、また、遺物の出土もなく構築時期については不明であるが、堆積土および被覆火山灰から判断できるものについては記載した。

第1号土壙 調査区L-104に位置し、東側1mに第9号土壙が近接する。第I層を剥いだ時点で、直径80cmの円形黒褐色の落ち込みを確認した。開口部は140×155cm、壙底部84×85cmの規模である。壁の立ち上がりは急で、確認面からの深さは、90cm以上である。底面から18cmの幅で、北北東方向へ約35cm地滑りを起こしている。堆積土は黒色シルト質土の單一層である。

第2号土壙 調査区L-102に位置し、第1号竪穴住居跡と第2号竪穴住居跡の中間地点にある。第VII層上面で黒色の円形の落ち込みとして確認した。開口部は158×197cm、壙底部は125×173cmの規模である。壁は、南部浮石をほぼ垂直に掘り込んでおり、確認面からの深さは46cmである。堆積土は黒褐色～暗褐色シルト質土層が主体で、中撤浮石および南部浮石火山灰が多く混入する。

第3号土壌 調査区N—94に位置する。馬の背状台地の頂上部付近で、第3号溝状ピットに隣接する。第IV層削平中に黒色で円形の落ち込みとして確認した。開口部は102×114cm、壌底部は96~100cmの規模である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、南部浮石層を壁面としている。確認面からの深さは、31cmである。堆積土は黒色のシルト質土が主体で、部分的に黒褐色土が混じる。

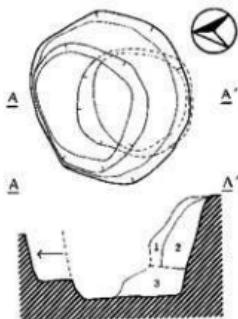
第4号土壌 調査区M—102に位置する。第2号竪穴住居跡東壁辺から80cmの位置に隣接する。第I層掘り下げ中に、黒褐色でほぼ円形のプランを確認した。開口部は153×168cm、壌底部は115×137cmの規模である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、南部浮石層を壁面としており、確認面からの深さは63cmである。堆積土は暗褐色土が主体で、人為的に埋め戻されたと思われる。

第6号土壌 調査区N～O—101に位置する。第2号竪穴住居跡南壁辺から180cmの位置に隣接する。第I層掘り下げ中に、第4号溝状ピットと同一レベルで確認した。開口部は108×120cm、壌底部は98×108cmの規模である。壁は垂直に掘り込まれているが、南部浮石層を壁面としているため、崩落が激しい。確認面からの深さは71cmである。堆積土は、6層に区分でき、人為的な堆積状況を示す。

第7号土壌 調査区L—104に位置する。第1号竪穴住居跡南東壁辺から170cmの位置に隣接する。第1号竪穴住居跡のプランの確認中に、不整円形の落ち込みとして確認した。開口部は157×158cm、壌底部は55×68cmの規模である。壁は「V」字状に掘り込まれ、底面は第VII層まで達している。確認面からの深さは110cmである。底面から20cm幅で、北北東方向に約45cmの地滑りを起こしている。

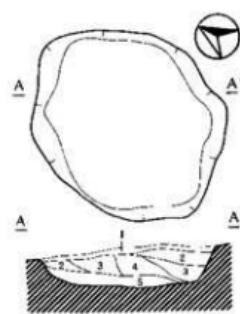
第8号土壌 調査区M—103～104に位置する。第I層掘り下げ中に、黒褐色の円形の落ち込みとして確認した。開口部は110×130cm、壌底部は85×86cmの規模である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは61cmである。堆積土は8層に区分でき、人為的な堆積状況を示す。

第9号土壌 調査区L—100に位置する。第2号竪穴住居跡北西コーナーから130cmの地点に隣接する。第I層掘り下げ中に、黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認した。開口部は119×130cm、壌底部は91×103cmの規模である。壁はやや傾斜して南部浮石層を掘り込んでおり、確認面からの深さは60cmである。堆積土は、9層に区分でき、人為的な堆積状況を示す。



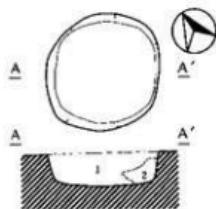
第 1 号 土 塚

- 1層 7.5YR 5 黑褐色 シルト質 深部浮石層
- 2層 2.5YR 5 黑 色 シルト質 浮石層
- 3層 7.5YR 5 明褐色 浮石 层部浮石層



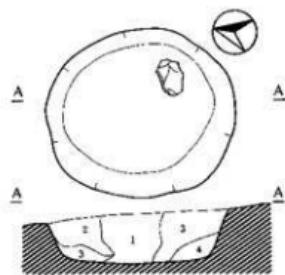
第 2 号 土 塚

- 1層 10YR 5 黑褐色 シルト質 2~10mm以下の浮石が多少混入
- 2層 10YR 5 黑褐色 砂 質 中間浮石を多少含む
- 3層 10YR 5 黑褐色 シルト質 全体の80%が約5~40mmの浮石
- 4層 10YR 5 黑褐色 シルト質 30%を3層の浮石
- 5層 10YR 5 黑褐色 シルト質 5~10mmの浮石及び中間浮石



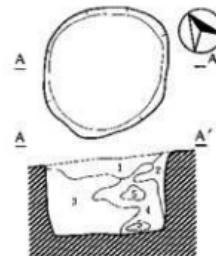
第 3 号 土 塚

- 1層 7.5YR 5 黑 色 シルト質 2~10mm大的浮石が3%混入
- 2層 10YR 5 黑 黄褐色 砂 質 2~10mm大的浮石粒が混入



第 4 号 土 塚

- 1層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 南部浮石層
- 2層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 南部浮石層
- 3層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 南部浮石, 中間浮石混入
- 4層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 南部浮石 层部浮石, 中間浮石混入

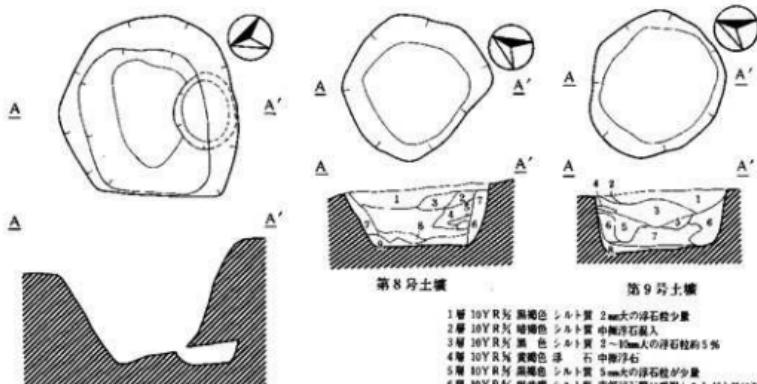


第 6 号 土 塚

- 1層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質
- 2層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 南部浮石, 北部浮石混入
- 3層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 小幅浮石, 黑褐色土分を混入
- 4層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 层部浮石, 中間浮石混入
- 5層 10YR 5 黑 黄褐色 シルト質 层部浮石混入, 北部浮石混入

0 2m

図19 土 塚(1)



1層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 2~10mmの大浮石約5%	2層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 中幅浮石混入
3層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質	3層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質
4層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質	4層 10Y R 5号 黑褐色 泥 石 中幅浮石
5層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 2~10mmの大浮石約5%	5層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 5mmの大浮石柱が少々
6層 10Y R 5号 黑褐色 泥 石 中幅浮石の流れ込み	6層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 南部浮石層に黒褐色シルトが大量に混入
7層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 5~10mmの大浮石約15%	7層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 2~10mmの大浮石柱混入
8層 10Y R 5号 黑褐色 シルト質 5~10mmの大浮石約15%	8層 10Y R 5号 黑褐色 泥 石 南部浮石層

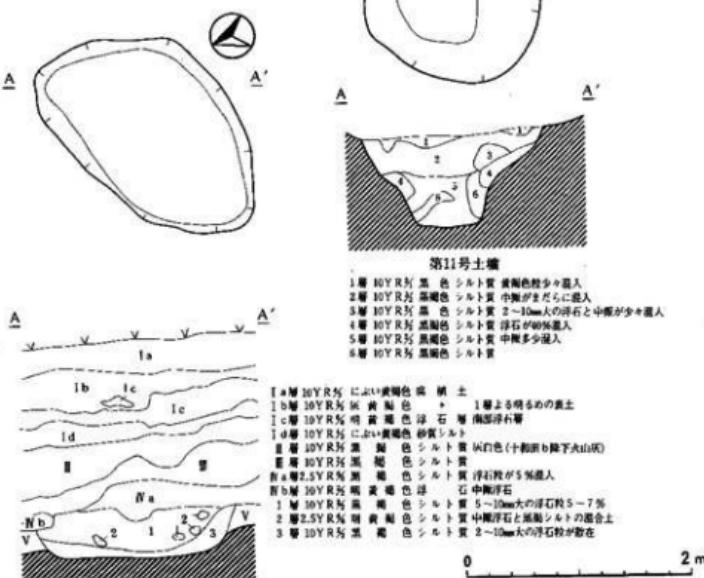


図20 土 塚(2)

第10号土壌 調査区M-98に位置する。南北の土層観察用ベルトで確認した。検出した10基の土壌中、掘り込み面を観察できる唯一の遺構である。十和田b降下火山灰が成層している第Ⅱ層の直下、第Ⅲ層から掘り込まれており、縄文時代の遺構である。開口部は133×232cm、壌底部は116×214cmで、確認面からの深さは36cmである。堆積土は3層に区分でき、人為的堆積状況を示す。

第11号土壌 調査区Q-96に位置する。第3号竪穴住居跡床面を精査中に黒褐色の円形の落ち込みとして確認した。開口部は155×158cm、壌底部は71×84cm、第3号住居跡床面からの深さは91cmで、断面形状はすり鉢状を呈する。堆積土は6層に区分でき、人為的な堆積状態を示す。本遺構は、第3号竪穴住居跡のかまど袖部直下から検出されていることから、本遺構が古い。また、断面形状がやや歪んでいるが、これは地滑りによって生じた歪みの可能性が高い。

(赤平智樹)

土壤一覧表

番号	グリッド	重複	平面形	計測値(cm)		
				開口部	壌底部	深さ
1	L-104	—	楕円	140×155	84×85	92
2	L-102	—	楕円	158×197	25×173	46
3	N-94	—	楕円	102×114	96×100	31
4	M-102	—	楕円	153×168	115×137	63
5	N~O-101	—	楕円	108×120	98×108	71
7	L-104	—	不整円	157×158	55×68	110
8	M-103,104	—	不整円	110×130	85×86	61
9	L-100	—	楕円	119×130	91×103	60
10	M-98	—	不整楕円	133×232	116×214	36
11	Q-96	3号住居より古い	不整円	155×158	71×84	91

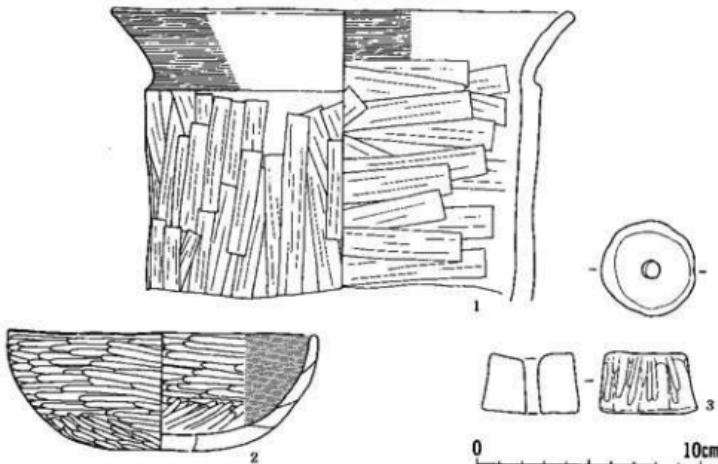
第V章 遺構外の出土遺物

ここでは、粗掘を進めている途中での基本層序中から発見された遺物や、発掘前の分布調査で採集したものの一括した。これらには縄文時代のものと奈良時代のものがある。

〔奈良時代の遺物〕

この時代の遺物には、土師器壺、同甕、土製紡錘車がある。

土師器壺は3点出土した。実測可能なものは図21-2のみである。いずれも非ロクロのもので2点が丸底、1点が平底である。2は丸底の底部から口縁部まで内溝しながら立ち上がる。他の2点と異なり、外面に段をもたない。内外面共入念なヘラミガキで仕上げている。内面全体と、外面の口唇部直下約1cm前後は黒色処理している。この個体は、成形時の粘土紐の接合面が明瞭に観察できる。図化できなかった資料の1点は外面の体部上位に軽い段を有する。なお、この段に対応した内面には段をもたない。この段から上位は内溝しながら立ち上がる。調整は内外面共ヘラミガキである。



土師器 紡錘車観察一覧

番号	地区層位	器種	部位	外 面	内 面	備 考	性緑番号
1	Q-99区	甕	胴 上	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	ヘラナデ		外 P 1
2	Q-99区	甕	略完形	全 面 ミガキ	全面ミガキ		外 P 2
3	表 探	紡錘車	完 形	ケスリの後ミガキ	—	孔径 6 mm	紡 1

図21 遺構外出土遺物(奈良時代)

他の1点は小型で平底の壺である。外面体部上位に軽い段をもつ。口縁部の立ち上がりはやや直線的である。調整は外面が段より上方は軽いミガキ、体部下半と底部は指によるナデである。しかし、ミガキは粗く口縁部全体に及んでいない。内面は比較的入念なミガキである。また黒色処理も施している。

土師器甕は3点出土した。図21-1及び図化できなかった破片資料の1点は頭部に1段、他の1点は3段以上の段をなす。前者の図化できなかった1点は肩部がやや張り出す球胴形をなす。内外面共ニビあるいは布等によるナデによって調整している。この個体は他の2点と異なり胎土中に多量の細砂、粗砂を含む。

前者も肩部が張り出るもので後者に近似した器形である。しかし胎土には細砂、粗砂の混入がない。これも内外面の調整はナデによる。後者の頭部につけられた段は浅い沈線状のもので肩部はややなで肩である。外面の体部はハケメ調整の後に軽いミガキ、口縁部内外面は横位方向のナデによる調整である。

図21-1は肩部の張りが全く無く、頭部の段からほぼ直線的に体部に至る器形の甕である。体部外面はヘラナデ、口縁部内外面及び体部内面はナデによる調整である。

紡錘車は土製で、断面が台形状をなす。上底3.4cm、下底4.0cm、孔径0.9cmである。側面はケズリの後にミガキによって調整が行われている。

〔縄文時代の遺物〕

縄文時代の遺物には、前期、中期、後期、晩期の土器と石器がある。発掘において出土したものは少なく、大部分遺跡内の分布調査で採集したものである。したがって、土器には、完形品及び復原可能土器ではなく、すべてが細片化している。石器には縦形石匙、磨製石斧、凹石等がある。

前期の土器群：この時期に属するものは図22-1～4の円筒土器である。胎土に少量の植物纖維を含む。このうち10は口縁部に短軸絡条体1種、胴部は多軸絡条体が施文されている。この文様は前期末葉の円筒下層d式の特徴である。2も同型式の口縁部片である。3、4は結束第1種の羽条縄文である。この施文文様のみで型式同定はできないが、円筒下層d式期には多様される文様である。5は纖維混入の度合いからみて、上述の型式期のものと思われる。

中期の土器群：図22-6、7の2片で同一個体である。深鉢形の口縁部片である。6は太い貼付隆帯とその上面に縄の馬蹄形状の圧痕と側面圧痕を特徴とする。円筒上層式に属する。

後期の土器群：図22-8、10～13である。浅い沈線で文様施文されるもの（8、12、13）、縄文地のもの（11）、短軸絡条体回転文のもの（10）に大別できる。後期初頭から中葉にかけての土器群である。

晩期の土器群：注口土器（図23—1）、精製深鉢形（9、16）、粗製深鉢形（17）、深鉢形の底部（18）である。

1の注口土器は、注口部が欠損している。外面は口縁部から底部まで丁寧に磨いて仕上げている。文様は無いが体部の張り具合や口縁部の形状は晩期初頭の所産として把えられる。

9、16は大型の割には薄い器厚である。2片共、波状の口縁部片で、外面文様は平行沈線と、三叉文の組合せである。大洞B式の特徴をもつ。

17は極めて細いLR縄文で、縦位施文に特徴がある。晩期中葉であろう。

14、15は比較的太い縄文で、14は帯状のLR縄文、15はLRの斜縄文である。15は口唇部が平坦に面取りされている点に特徴を有する。後期終末期から晩期初頭に位置づけられるであろう。

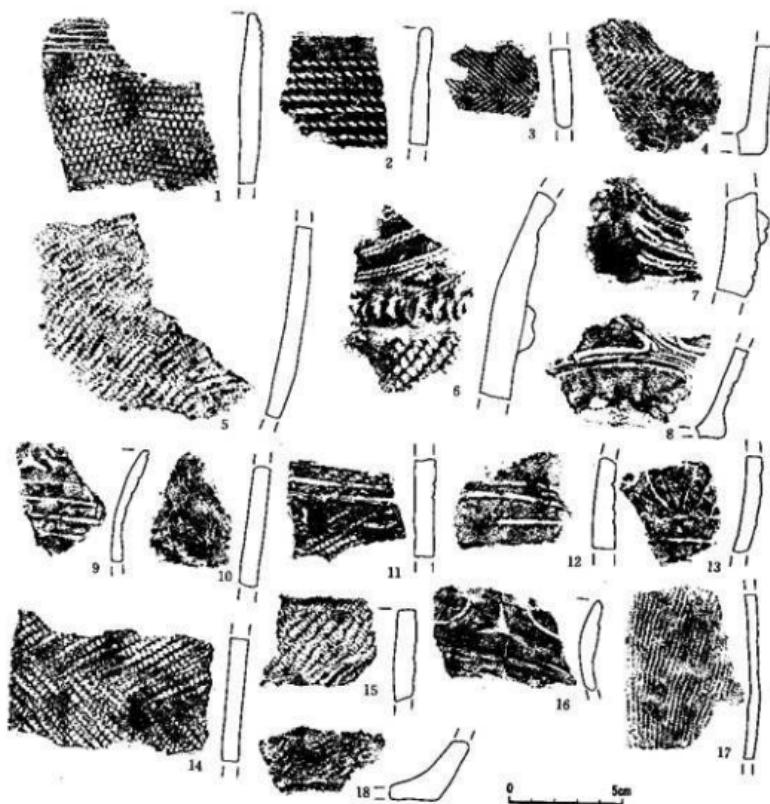
図23—2、3、4の3点には上底風の底部であることに共通点を有する。また外面文様はLR斜縄文であることでも共通である。後期終末期から晩期初頭のものであろう。

(三浦圭介)

石 器 図24—1～5

調査区内から出土した石器は、石匙1点、磨製石斧1点、凹石3点の合計5点である。1は、縱長剥片の両側縁に調整剥離が施された縱形石匙である。薄手の剥片を素材としており、つまみは長軸の左寄りに作出され、抉りは深い。器長6.8cm、器幅5.2cmで、石質は珪質頁岩である。2は、刃部の部分は欠損しているが、磨製の石斧である。基部の先端部には敲きの痕跡が残る。石質は頁岩である。3～5は、通常、凹石と呼ばれる類である。両面に、2個一対の凹部を有する。石質は、いずれも安山岩である。これらの時期については不明であるが、おおよそ、御文時代のものであろう。

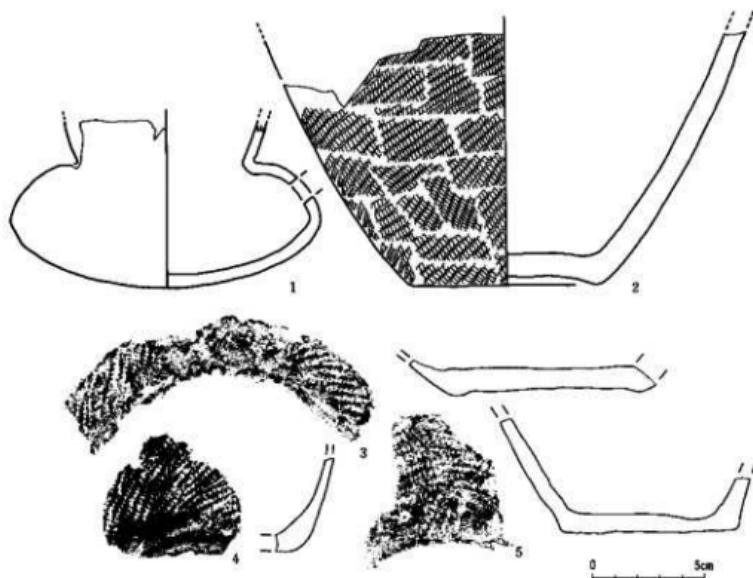
(赤平智尚)



調文土器観察一覧

番号	地区・層位	部 位	地 図	分 類 文 標 文 の 特 徴	登錄番号
1	東	盤	11	円筒下唇 円筒下唇	No.10
2	東	盤	12	円筒下唇 円筒下唇	No. 8
3	東	盤	13	円筒下唇 円筒下唇	No. 5
4	東	盤	14	円筒下唇 円筒下唇	No. 3
5	東	盤	15	円筒上唇 円筒上唇	No.12
6	東	盤	16	円筒上唇 円筒上唇	No. 7
7	東	盤	17	円筒上唇 円筒上唇	No. 6
8	及	底	18	後期切頭	No.23
9	東	底	11	大 圓 B	No.22
10	東	盤	10	後 期 初 頭	No.15
11	東	盤	11	後 期 初 頭	No. 1
12	及	底	12	後 期 初 頭	No.16
13	東	盤	13	後 期 初 頭	No.2
14	東	盤	14	後 期 初 頭	No. 2
15	東	盤	15	口 唇	No.14
16	東	底	16	大 圓 B	No. 4
17	東	盤	17	後 一 唇	No.13
18	東	盤	18	後 一 唇	No.20

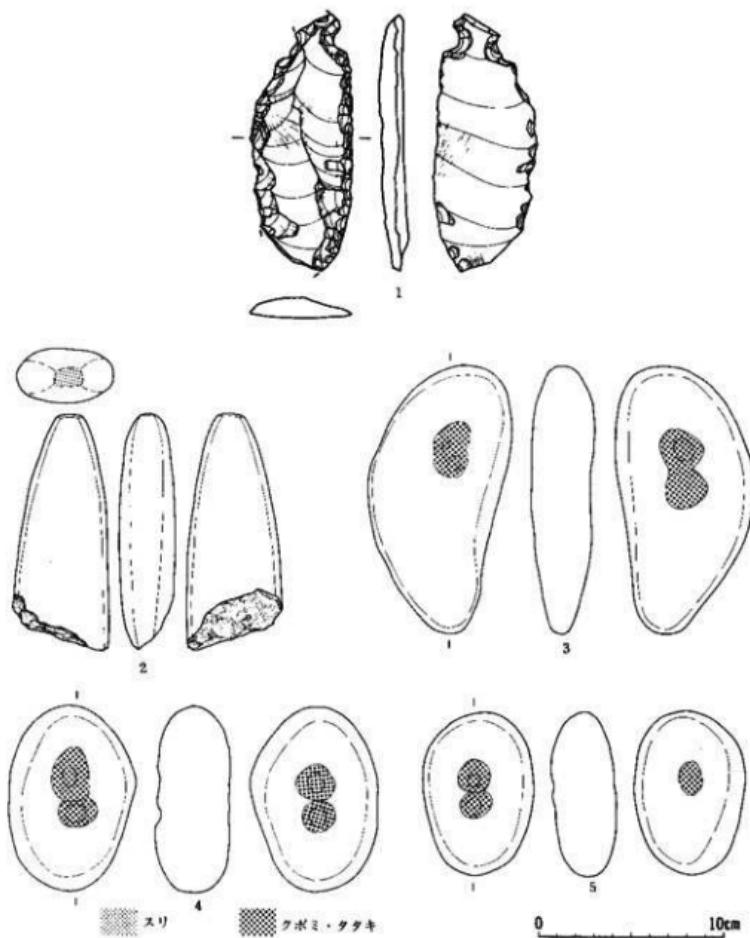
図 22 遺溝外の出土遺物(標文時代)



縄文土器 説明一覧

番号	地区・層位	部 位	時 期	外 観 文 様 施文 の 特 徴	登録番号
1	表 塗	略光形	大 潟 B	注口土器、外面は全面磨きによる調整	No14
2	表 塗	胴上部	後 ～ 晩	L.R.单跡織文	No13
3	表 塗	底 部	後 ～ 晩	L.R.单跡織文	No28
4	表 塗	底 部	後 ～ 晩	L.R.单跡織文	No 3
5	表 塗	底 部	後 ～ 晩	L.R.单跡織文	No30

図23 造構外の出土遺物(縄文時代)



遺構外出土石器計測表

番号	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
1	N-100	I	(68)	27	6	13.3	珪質	石匙	1	
2	Q-93	IIa	(127)	52	30	(288.5)	頁岩	磨片	2	
3	N-97	II	145	74	34	479	安山	凹石	79	
4	L-99	II	101	68	40	391	安山	凹石	102	
5	L-100	—	88	60	34	253	安山	凹石	83	

図24 遺物外出土石器

第VI章 分析と考察

第1節 前比良遺跡出土の炭化木

元奈良教育大学教授 鳥倉巳三郎

青森県三戸郡南部町大字赤石字前比良の遺跡から出土した植物性炭化物の種類を調べた。

試料の大部分は1—2 cm大の木炭で、破断面を反射顕微鏡で観察することができたが、若干は数mmの小片で、断面を作るとき砕けるので、必要な面を得難く、同定は不確実または不能となった。2試料は葉様の葉基炭であった。

試料の出土地点・遺構——前比良3号住居跡（奈良時代）

調査結果——

試料No.	出土層位	3層	樹種	コナラ
2	〃		コナラ	(写真10—1)
3	〃		コナラ	
4	〃		コナラ	(写真10—2)
5	〃		ヤチダモ	(写真10—4, 5, 6)
6	〃		コナラ	
7	〃		コナラ	
8	〃		コナラ？	(碎性)
9	〃		(不明)	(碎性、細片化)
10	〃		コナラ	
11	〃		コナラ	
12	〃		コナラ	
13	〃		コナラ	
14	〃		コナラ	
15	〃		コナラ	
16	〃		コナラ？	(細片化)
17	〃		コナラ	(写真10—3)
18	〃		コナラ	
19	出土層位	床	イネ科植物の1種	
20	〃		イネ科植物の1種	

炭化木の構造

コナラ *Quercus serrata* MURRAY

早材部道管の大きな環孔材、晩材部に移ると道管は急に小さくなり、集って火炎状または放射方向にならぶ。放射組織は単列のもののほか、大きな幅広い複合性のものがある。

ヤチダモ *Fraxinus mandshurica* RUPR. var. *japonica* MAXIM.

環孔材、早材部の道管は大きく数環、晩材部はやや小さく厚壁で、疎らに分布する。放射組織は同性で1—3細胞幅。

炭化木の殆ど全部はコナラ炭である。コナラは建材、用材、燃料として広く用いられてきたもので、炭化木は県下の多くの遺跡から出土している。

ヤチダモはトネリコの類で、性質はコナラにやや似る。炭化木の住居跡等からの出土例としては、上北町松原遺跡、南郷村田ノ上遺跡、八戸市蘿庭遺跡、和野前山遺跡などがある。

第2節 前比良遺跡第3号住居跡の復原考察

八戸工業大学助教授 高島成侑

1. はじめに

訪れた前比良遺跡は、中世の館跡として知られる「赤石館」より続く名久井岳の西側中腹にあり、馬淵川対岸にある多くの館跡を望む高台に位置していた。

この遺跡の調査では3棟の住居跡が検出された。いずれも焼失したものであり、各種の建築部材が炭化した形で出土している。3棟のなかでは、ここで扱おうとする第3号住居跡が最も良好な状態で検出されたものである。

第3号住居跡が造られた時期は、その出土遺物の調査から、奈良時代後期に当たる8世紀後半と推定されている。この時期の住居跡について建築的な復原考察が加えられた例は、東北地方では皆無であるが、ここでは、出土した炭化材などの発掘調査で得られた多くの知見によりながら、当時の建築技術やこの地方の古民家に残されている形式などを考慮して、住居跡の復原を試みた。

調査に当たられた青森県埋蔵文化財調査センターの担当者の方々には、数度にわたって細かな資料の提供をいただき、また、ことある毎に現場で得られた知見を披露していただいた。奈良時代後期の住居跡について、復原考察を試みる機会を与えてくださったと共に深く感謝するものである。さらに、調査指導員として参加された村越 謙先生には多くの御教示をいただいた。ここに記して謝意を表すものである。

2. 用材について

出土した炭化材のうちで、その形状が判明したものは10片であり、そのうちの7割が丸太材であり、3割が平板状のものであった。検出された柱穴より見られる柱の形状が長方形に近い角柱であることからすると、この平板状のものが柱や梁や桁などに当たるものと見られ、細い丸太材のものは垂木などに相当するものと考えられる。

樹種の調査によると、出土した炭化材の大部分がコナラであると報告されている。コナラは、ミズナラやクヌギなどと共に樺類に属する落葉広葉樹であり、現在では主として薪炭用に用いられ、建築の土木の用材として用いられることが少ない樹種であるが、こここの住居跡では、このコナラの丸太材や割り板材が、軸組の主要な部材として用いられていたのである。

さらにここでは、イネ科植物と判定されたものによって網代に編まれた葦のようなものの断片も炭化したまま出土しており、住居内の敷き物として用いられたことが推察される。

3. 復原に当たっての条件

ここで住居跡を復原するといつても、部材が完全に残っていたのではなく、発掘調査によつて得られた知見と僅かの炭化材があるだけであり、復原図を描くに当たっての条件を整理しておく必要があろう。

ここでは、第3号住居跡を建造した際の順序を想定し、判るかぎりの数値を取り入れながら、復原図作製の準備をしたい。

① 敷地を選定し、輪郭が約〔6.0m×6.0m〕と決定され、この輪郭に沿つて地面が掘り起された。当時の地表面（生活面）からおよそ1.0mの深さまで掘られた。

② 堀り起した床面の凹凸をならしてほぼ水平とし、約0.1mの厚さで粘土を貼つて「貼り床」とした。

③ 窯の位置が北側壁の中央に決定され、壁の外へ1.6m程の長さの煙道が掘り込まれた。床面も窯の部分が掘り下げられ、0.6m程の間隔を置いて両側に石を立て、粘土によって窯が構築された。

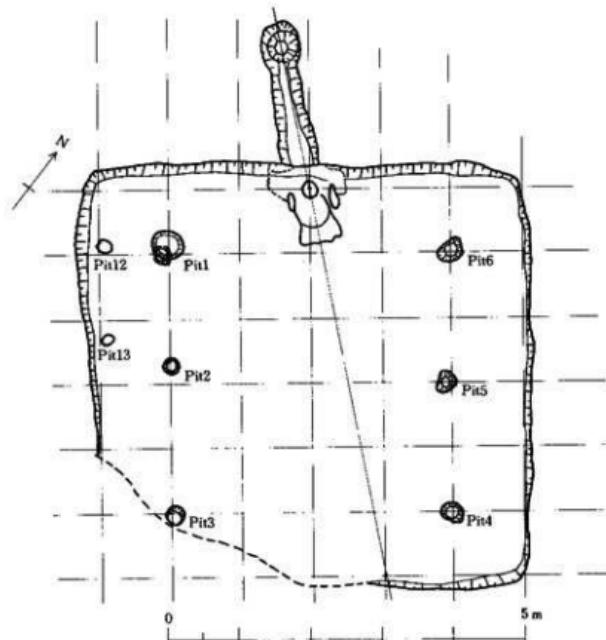


図25 前比良遺跡第3号竪穴住居跡平面図

④ 壁穴周囲の壁が整形された。調査では、壁の直下に溝や柱穴などの痕跡は明確には検出されていないが、高さが1.0mほどの壁穴の壁を考えると、矢板のようなものが打ち込まれていた可能性はある。

県内でこれまでに出土している矢板の例は、幅が0.25～0.30mで厚さが0.03mほどのものが多いようである。矢板を打ち込み、これを杭に絡めた横棒で押させていたものであろう。

⑤ 柱の位置が決定され、柱穴が掘られることとなる。柱位置の決定は、あるいは、図示した平面図のような地割によってでもなされたものかもしれない。すなわち、壁穴の縦と横とをそれぞれ6等分する区画によって主柱や間柱の位置が決定されているようである。また、この区画線により竈の煙道方向も決定されるが、これは風の向きによったのかもしれない。

柱間は、東西方向が約4.0m、南北方向が約3.6mに取られており、南北方向には間柱とも見られる柱穴が検出されている。

柱は長方形の角柱であることが確認されているが、その高さについては明確ではない。ここでは梁間方向において、壁穴の床面からの梁の下端までが正方形となるものとして、柱高さを3.6mとして設定した。

⑥ 柱が立てられると小屋組を造ることとなる。この住跡が小屋組をもっていたかは不明であるが、ここでは年代的に、仮首組による小屋が架けられていたものとして、後の考察を進めた。梁間を短辺として南北方向に取り、柱穴の存在から間柱を立て、真東の立つ仮首組を想定した。

⑦ 次に屋根葺であるが、屋根が地面まで葺下ろされていたかは不明であり、垂木尻が地面に付いていたという確証もない。しかし、側壁が立ち上がっていったという確認も得られないで、ここでは地面まで葺下ろされていたものとして図を描くこととした。

⑧ 出入口については、調査では確認されなかった。多くの壁穴住跡では竈の対面側に出入口が想定されているようであるが、その部分を調査することができず、ここでは、西側にpl2、pl3として検出された柱穴があるあるいは出入口と関わりのある梯子などの痕跡かもしれないと考え、この場所を出入口と想定した。

出入口の建具についても手掛かりは得られなかつたのであるが、扉のようなものよりは、民家に見られる「吊上げ戸」のようなものを考えたほうがいいのではなかろうか。

4. 想定復原図について

以上に述べたような条件を設定したうえで、壁穴の大きさや柱穴の寸法にしたがって描いてみたのが、ここに掲げた二枚の断面図である。細部については、なお疑問な点も多く残されているが、概略の形は得られたのではないかと考えている。多くの方々のご教示をお願いしたい。

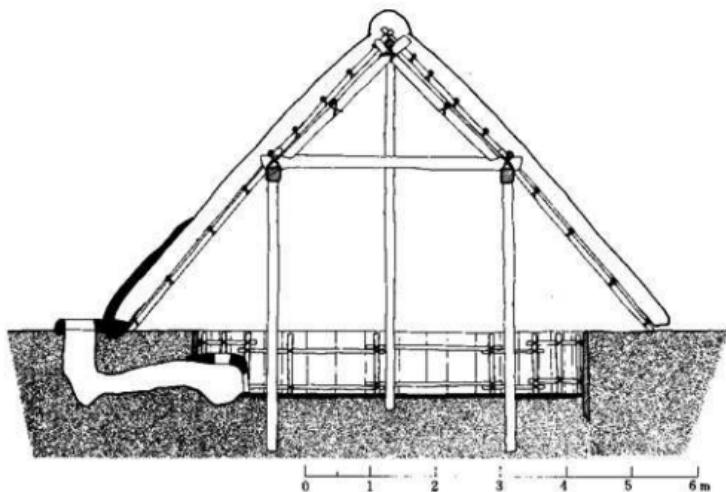
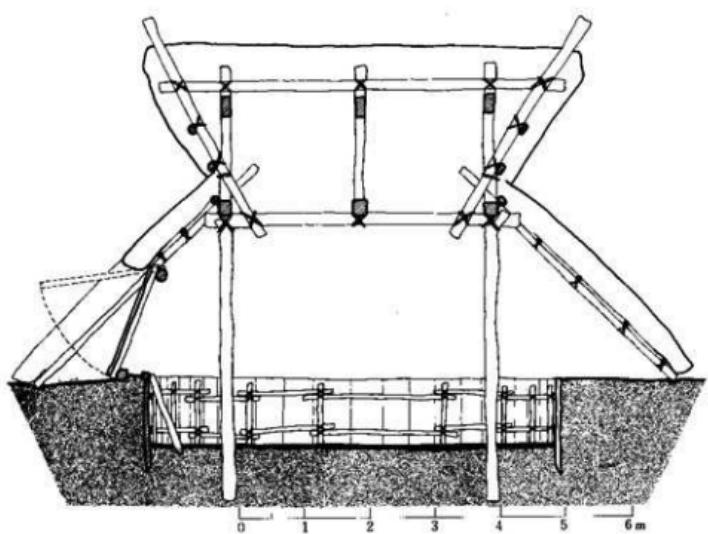


図26 前比良遺跡第3号竪穴住居跡復原図

第3節 溝状ピットについて

検出した6基のピットについて、若干分析を試みたい。〈a. 遺構の規模・形状・配列〉溝状ピット一覧表からその規模について見てみると、開口部の長軸は276～425cm、短軸は81～186、底面の長軸は215～368cm、短軸は18～30cm、深さは125～270cmであり、平均して、開口部は156×349cm、壇底部23×318cm、深さ211cmである。これらの開口部の平面形状は、第5号溝状ピットの先端部がやや鉄アレイ状に膨らむものの、ほぼ精円形で規格性が窺える。短軸の断面形状は、「Y」か「V」字状を呈するものの、いずれも、底面は幅20cm前後で極端に先細りしており、落とし穴的な様相である。次に、遺構の長軸方向については、図27（溝状ピットの長軸方向）に示してある。ただし、いずれも北からの方位角として示したものである。（地滑りによって長軸方向が東側へずれたものは、壇底部の長軸方向を使った）これによると、6基の遺構群は、西～西北西に向くもの4基、北西に向くもの2基となっている。これは、地形にたいして、前者はほぼ45°の角度であり、後者はほぼ横走している。さらに、溝状ピット相互の間隔は、最短で2号と5号の3.5m、最長で2号と4号の16.5m、平均して8.4m間隔で並列に構築されている。この点から見て、1・2・4・6号ピット、3・5号ピットはそれぞれ連繋する可能性がある。この、地形の傾斜と遺構の長軸方向との関係は、本遺構の性格を解明する上で、極めて重要な点である。従来言られてきた落とし穴説をとれば、けもの道に対してほぼ直角にしかける点で合致する。後者はやや希薄である。しかし、本遺跡で検出された6基（調査は5基）のみでこれらを論することは、危険性が大きいため事実のみ明記するに留める。〈b. 遺構の立地〉本遺跡は、名久井岳の北麓の先端部、標高112m付近の小丘陵上に立地する。現地形は北西方向の馬瀬川にむかって緩やかに傾斜しており、遺構は、この馬の背状台地の頂上部付近に配置されている。検出した地点は、全長約80mの調査範囲の中で、中央寄り約40mの標高108～112mにかけて、6基が比較的単純な配列で検出されている。これは、これまでに調査された発茶沢遺跡や長七谷地遺跡などの海岸部に近い遺跡などで見られる複雑な配列状態に対し、山間部の遺跡で見られる特徴を示す。〈c. 遺構の年代〉ピット内から遺構の時期を判定できるような遺物は出土しなかった。そこで、他の判断材料として検出層位が判るものについて見てみたい。① 第6号は奈良時代の住居跡に切られており、奈良時代よりも古い。② 第2号、第3号は、十和田b降下火山灰層より下から掘り込まれており、弥生時代よりも古い。③ 第1号の掘り込み面は第IV層中からで中撒浮石層を被っており、縄文時代中期以降である。④ すべての遺構が南部浮石層を掘り込んでおり、縄文時代早期以降である。前述したが、本遺跡では、I～VI層までの擾乱が激しいため、検出層位の判断が極めて難しく、以上の4点のみで

ある。これから判断すると、本遺跡における溝状ピットの年代は、おおよそ縄文時代中期以降から弥生時代中葉以前と思われる。

(赤平智尚)

前比良通跡溝状ピット計測表

No	グリッド	長軸(上・中・下)cm	短軸(上・中・下)cm	深さcm	標高m	長軸方向	備考
1	L-M-103	391・310・296	172・98・22	212-235	109.24-109.44	N-78°-W	
2	P-Q-97	425・345・368	185・32・22	257-270	114.10-114.16	N-73°-W	
3	N-95	276・-・215	-・-・-	125-140	115.67-115.92	N-41°-W	
4	N-101	321・295・360	81・-・18	176-199	110.05-110.98	N-72°-W	2号住居より古い
5	N-O-96-97 (333)・295・360	186・65・30	-	175-213	113.84-114.05	N-45°-W	
6	Q-R-95 (430)・-・-	-・-・-	-	-	-	N-87°-W	3号住居より古い

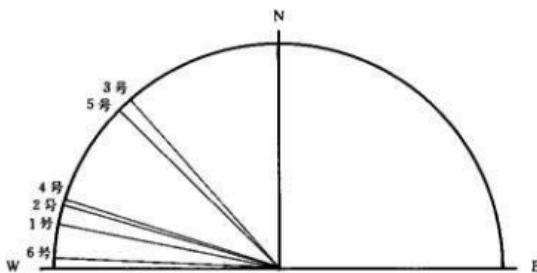


図27 溝状ピット長軸方向

第4節 地滑りについて

第1号溝状ピットに端を発し、次々に地滑りに因る遺構の分断そして移動が明らかになったが、その時期と遺構との関連について若干触れてみたい。まず、地滑りの状況であるが、調査区内で検出した20基の遺構中、地滑りを観察できたのは、第3号竪穴住居跡ピット1および3、第1号溝状ピット、第2号溝状ピット、第4号溝状ピット、第1号土壙、第7号土壙の7基だけである。これらの遺構は、ほぼ1直線上に並ぶ。地滑りは、基本層序第VII層（南部浮石層）と第VIII層（ローム層）の層理面で生じており、第VIII層上面では、地滑りの時に発生した高熱のために赤褐色に焼け焦げた痕跡が残る。この第VII以下を掘り込んで構築された遺構から、この現象が確認できたものである。

各遺構の地滑り観察表

遺構名	グリッド	底面	標高m	滑り角	滑り幅cm	滑り方向
第3号住居Pit 1	P-97	縦層	116.675	—	20	北
第3号住居Pit 3	P-97	縦層	116.675	—	20	北
第1号溝状ピット	L-M-103	豊層	111.682	13°	48~65	北
第2号溝状ピット	P-Q-97	豊層	116.255	9°	20	北北東
第4号溝状ピット	N-101	刃層	112.962	13°	40	北北東
第1号土壙	L-104	縦層	113.20	—	35	北北東
第7号土壙	L-104	縦層	111.129	12°	45	北北東

この表からもわかるとおり、地滑りが発生した遺構はすべて第Ⅲ以上掘り込まれている。また、地滑りの幅は、馬の背状の台地の高位面では約20cm、中腹では40~60cmであり、最下位の第1号溝状ピット付近が最大のズレである。また、地滑りの起こった方向は、北ないし北北東であり、これは、台地の傾斜とほぼ一致する。

さて、地滑りが直接の原因で、この様に遺構が分断された例は、八戸市の牛ヶ沢(3)遺跡がある。そこでは、八戸火山灰VI層中でこの現象が生じておらず、4メートル近くも移動した事が報告されている(春日:1984)。その時期は、遺構との関連から縄文時代前期末葉以降から晩期中葉前後と推定している。では、本遺跡において、地滑りが発生した時期について考えてみたい。上限で最も可能性があるのは、8世紀中頃に構築されたと思われる第3号竪穴住居跡の主柱穴が、この地滑りによって分断されていることから、8世紀以降であることは間違いないまい。ただし、下限については推定できる資料が無いので不明である。では、これだけの現象を引き起こすだけの天変地異ならば、文献に記録されてはいないだろうか。この時期の天災について、「文献史料から見た古代奥羽での天災」(鈴木:1982)の論考がある。それによると、奥羽地方では古代に限定すれば8世紀中葉以降だけでも、実に4回の大地震に遭遇している。このほかにも、鳥海山をはじめとする火山の噴火も日本三代実録等に記録されている。さらには、地滑りを引き起こす原因として大雨に因るとも考えられる。本遺跡の各遺構もこれらのいずれかが要因となって、8世紀中葉以降に起こったものと思われる。

(赤平智尚)

第VII章 まとめ

1. 遺跡は名久井岳北麓の標高120mの丘陵西斜面に立地する。奈良時代後期の集落跡を主体とした縄文時代前期・中期・後期・晩期との複合遺跡である。
2. 今回の調査によって検出された奈良時代後期の遺構は竪穴住居跡が3軒、貯蔵庫と推定される竪穴造構が1基である。いずれも火災を受けていることや、この配置上から、同時に機能していたものと考えられる。これらの年代は8世紀後半に位置づけられ、集落としては短期間の存続とみられる。この地方は当時の「式薩体村」であり、他の東北地方北部の各村と同様、大和政権の制圧の対象地であった。集落の消滅の原因がこのような当時の政治情勢に直接起因するのか明らかでないが、当時としては貴重品であろう鉄製品を含む生活用品をそのまま残したことは、不慮の災害時における避難に急を要したことが想定される。この後再びこの地に居を構えることがなかった。
3. 縄文時代では少量はあるが前期・中期・後期・晩期の土器、石器の他に土壙10基、溝状ピット6基がある。この溝状ピットは「狩猟用の落し穴」としての機能を考えられているものと同一のものである。これは数本を1単位として獣路に直交するように設置されるものであるが、本遺跡の場合も少なくとも4本を単位として、斜面に直交するように設置されている。本遺構が機能した時期を特定することができないが、堆積層の状態は縄文時代の後半期であることを示している。
4. 今回の調査で遺跡全体が地滑りを起していたことが判明した。地滑りは基本層序第VII層（南部浮石層）とその直下のⅧ層との層理面で発生しており、滑った方向は北北東で、距離は丘陵斜面中腹40～60cm、上位で20cmである。このため、検出された遺構のうち、第Ⅷ層に達しているものは全て遺構の中程でずれが生じていた。この発生時期は第3号住居跡との関係から8C後半以後である。

（三浦圭介・赤平智尚）

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1978 「青森市三内遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書 第37集
〃 1980 「碇ヶ関村古館遺跡」 〃 第54集
〃 1980 「長七谷地貝塚」 〃 第57集
〃 1980 「板留(2)遺跡」 〃 第59集
〃 1982 「発茶沢遺跡」 〃 第67集
〃 1984 「牛ヶ沢(3)遺跡」 〃 第86集
〃 1986 「沖附(1)遺跡」 〃 第100集
- 阿部 義平 1971 「ロクロ技術の復元」 考古学研究 18巻2号
- 新谷 武 1981 「五所川原周辺の須恵器窯跡出土の長頸壺について」 弘前大学考古学研究第1号
- 江上・桜井・関野 1958 「館址一東北地方における集落跡の研究」 東京大学出版会
- 岩見 誠夫・船木 義勝 1985 「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」 秋大史学 32号
- 氏家 和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」 歴史 14 東北史学会
- 金沢 陽 1984 「日本出土の青磁釉花皿について」 白水10
- 菊池 実 1987 「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題」 研究紀要4
- 工藤 雅樹・桑原 慶郎 1972 「東北地方における古代土器生産の展開」 考古学雑誌 57巻3号
- 桑原 慶郎 1976 「須恵系土器について」 東北考古学の諸問題
〃 1977 「津軽で作られた須恵器」 考古風土記 2号
〃 1986 「律令時代—津軽で焼かれた須恵器—前田野目窯跡」 発掘が語る日本史
- 坂詰 秀一 1975 「津軽前田野目窯跡群をめぐる課題」 北奥古代文化 7号
- 桜井 清彦 1958 「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」 館址
- 南部町教育委員会 1982 「南部町文化財写真集」
- 南部町郷土史研究会 1987 「ふるさとなんぶ」 第10号
- 福田 友之 1981 「構状ピット」研究に関する覚書 弘大考古学研究 第1号
- 三辻 利一・松山 力ほか 1983 「青森県下の遺跡に堆積する火山灰の螢光X線分析」
- 三浦 圭介 1982 「青森県における奈良・平安時代土器編年一覧」 青森県考古学会発表資料
- 村越 潔・新谷 武 1974 「青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報」 北奥古代文化 4号

写 真 図 版



南側から

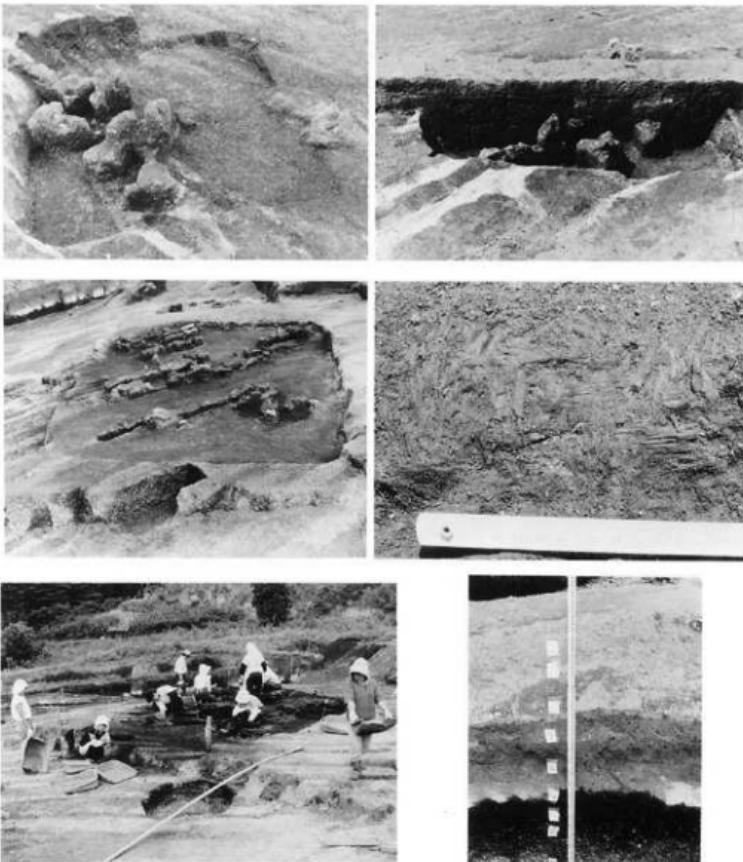


北側から



北西側から

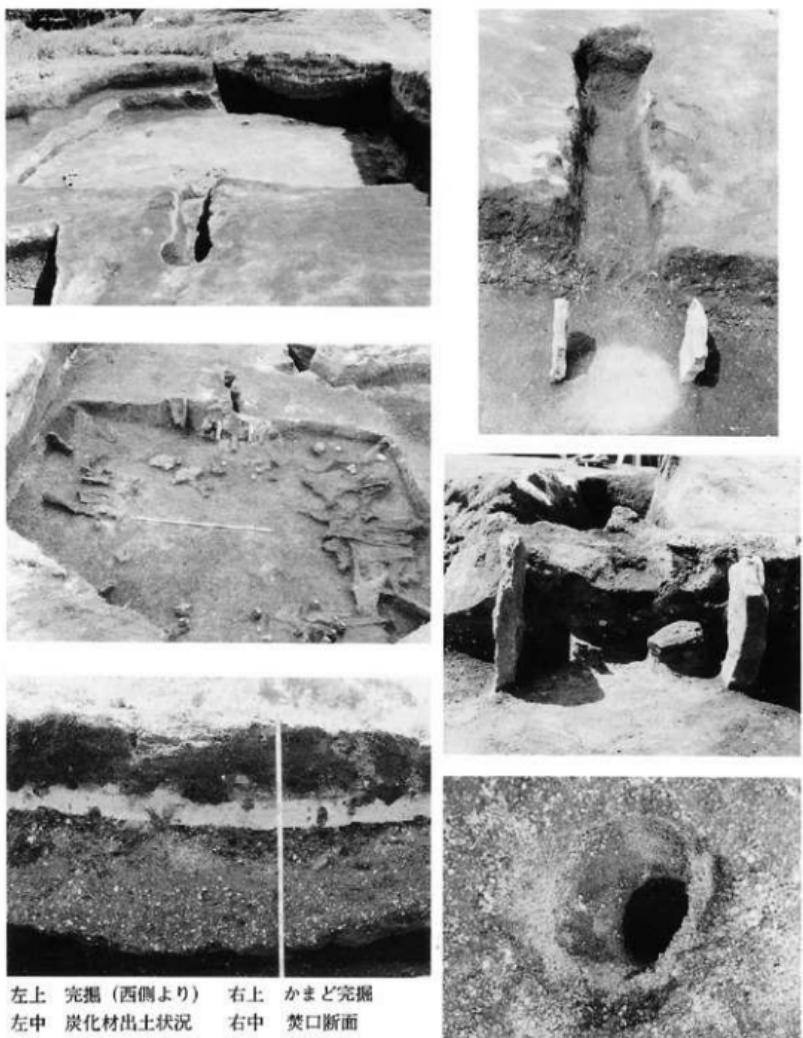
写真1 前比良遺跡遠景



上左 第1号竪穴住居跡 上右 同セクション
中左 第2号竪穴住居跡 中右 蕎?出土状況
下左 第2号竪穴住居跡調査風景

基本層序

写真2 第1・第2竪穴住居跡



左上 完掘（西側より） 右上 かまど完掘
 左中 炭化材出土状況 右中 焚口断面
 左下 土層断面（白い部分十和田a降下火山灰）
 右下 主柱穴Pit1（地滑りあり）

写真3 第3号竪穴住居跡

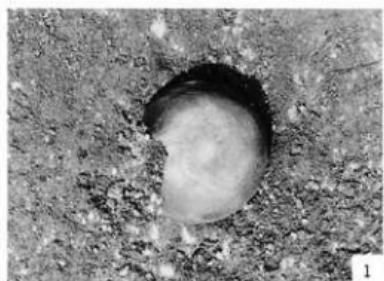


写真4 第3号竪穴住居跡出土遺物(1~3 土師器環
4 土師器甕 5~6 炭化材)
7 敷物 8 鉄製品)

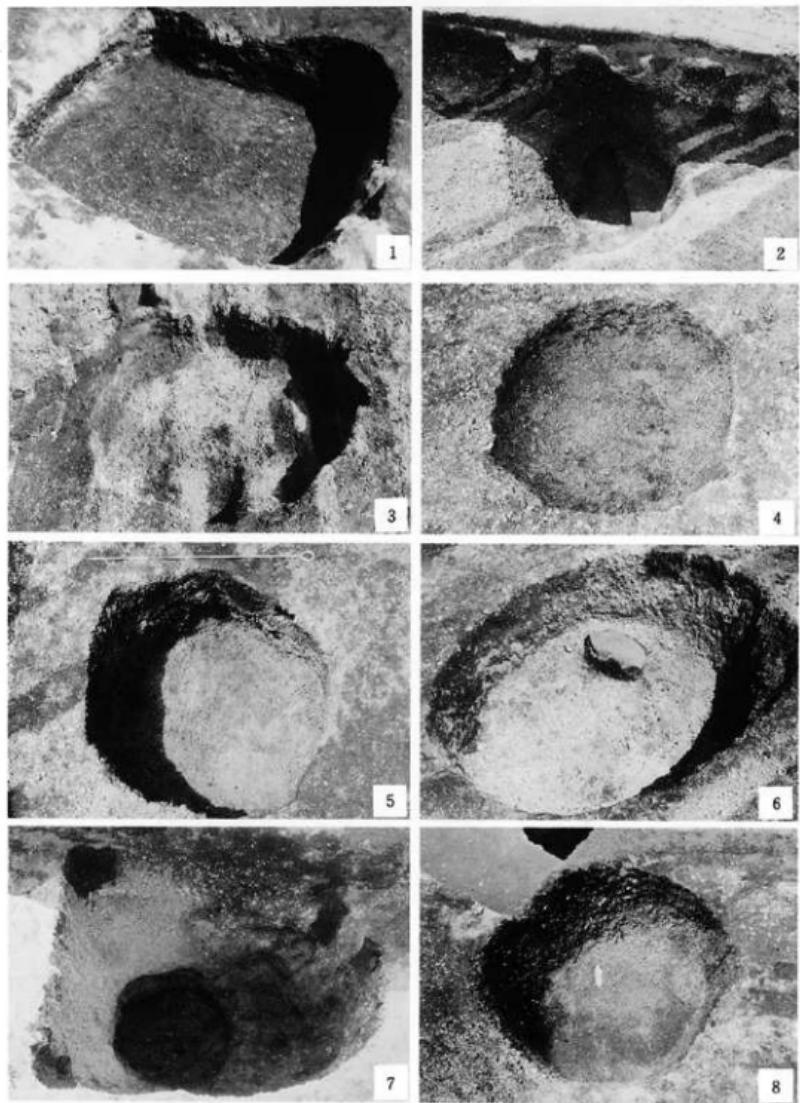


写真5 穴造構・土壤 (1・第1号豊穴造構 2・1号土壤 3・2号土壤 4・3号土壤
5・6号土壤 6・4号土壤 7・7号土壤 8・8号土壤)

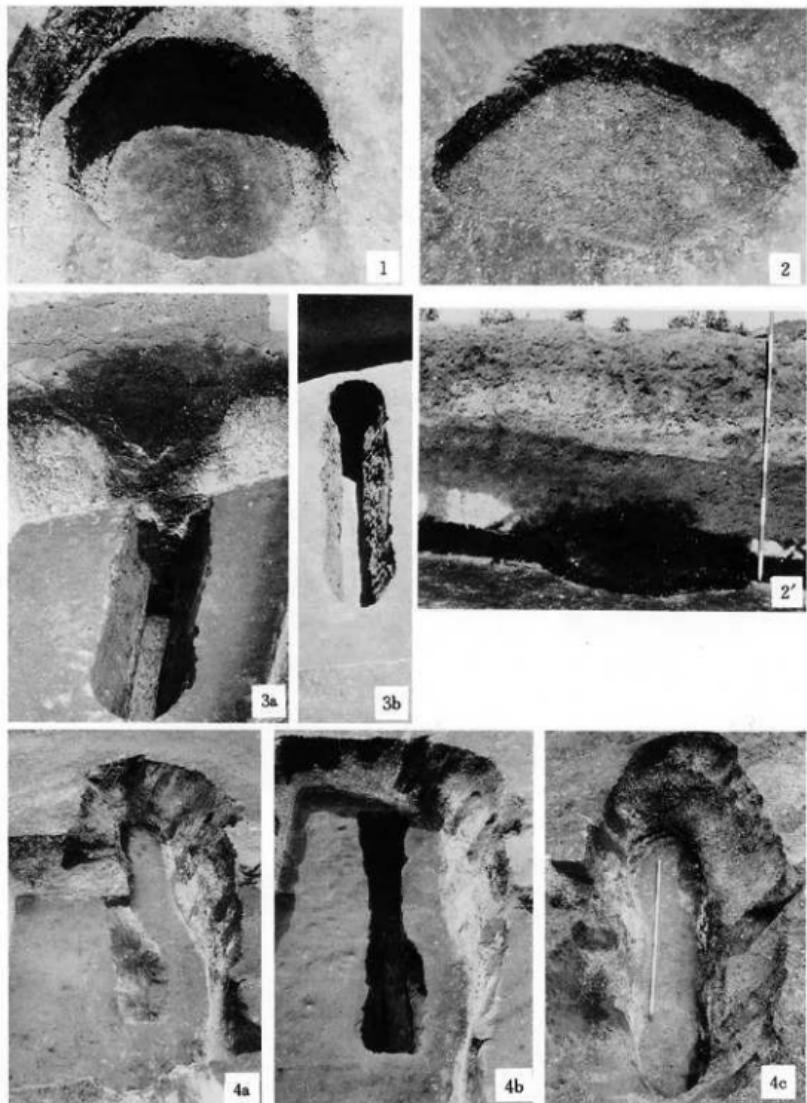


写真 6 土壤、溝状ピット (1 : 9号土壤 2・10号土壤
3 : 2号溝状ピット 4 : 1号溝状ピット)



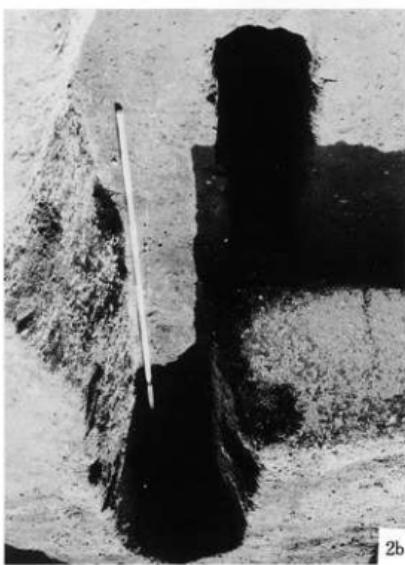
1a



1b



2a



2b

写真7 溝状ピット(1・4号溝状ピット 2・5号溝状ピット)

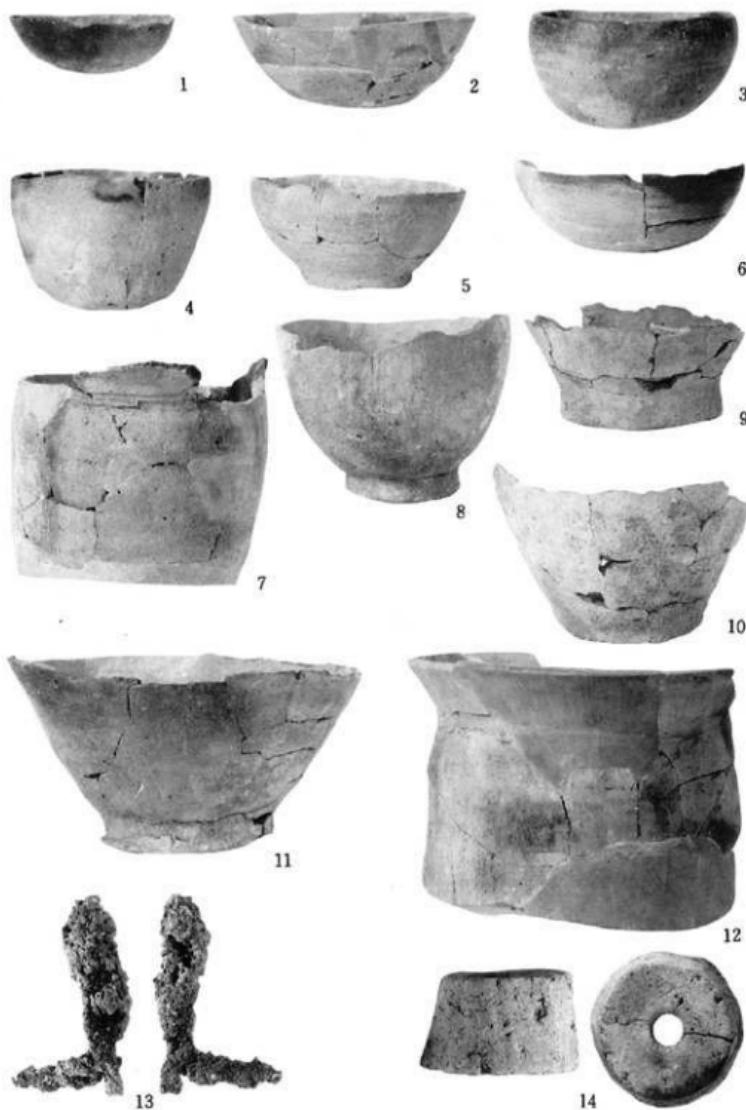


写真8 出土遺物(1~6 土師器環 7~12 土師器甕 13 鉄製品 14、紡錘車)

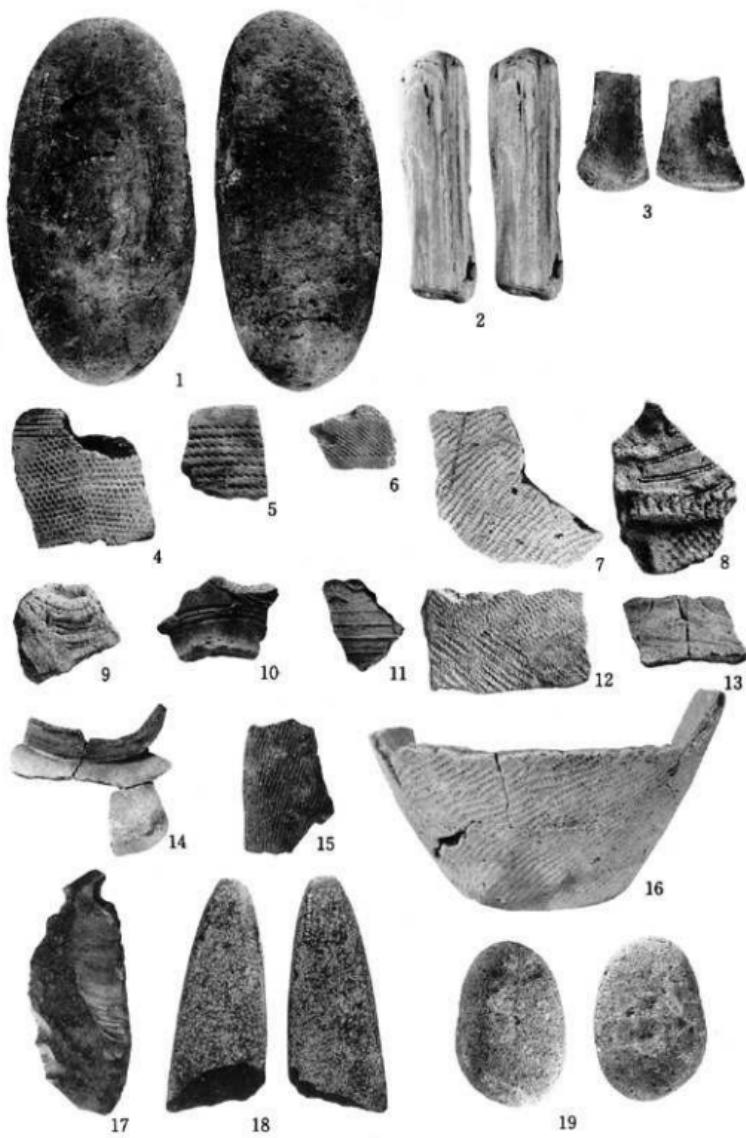
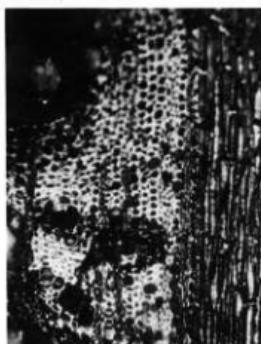


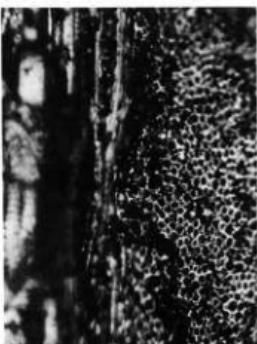
写真9 出土遺物(1~3 第3号竪穴住居跡出土 4~19 遺構外)



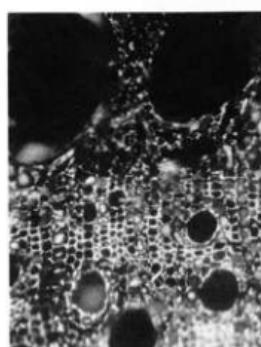
1. コナラ (No.2) 木口



2. コナラ (No.4) 木口



3. コナラ (No.17) 板目



4. ヤチダモ (No.5) 木口



5. ヤチダモ (No.5) 柄目



6. ヤチダモ (No.5) 板目

すべて×50

写真10 第3号竪穴住居跡出土炭化材顕微鏡写真

青森県埋蔵文化財調査報告書第108集

前 比 良 遺 跡
発 据 調 査 報 告 書

発行年月日 昭和63年3月31日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030-02青森市新城字天田内

152-15

印 刷 所 株式会社 誠 工 社

〒030 青森市橋本二丁目19-7

T E L 34-6141